始

ヨ-8K58

18
357

牛に關する傳說雜話

舟木夏江編

肉食奬勵會發兌

牛に關する傳說雜話

舟木夏江編

肉食奬勵會發兌

帝國圖書館藏

大正
2. 6. 17
受

序に代ふ。

らう〳〵と晴れ渡つた春の日の夕まぐれ、殘んの日光うす紅ひに野末の緑を彩どる時、家路を辿る牛の背に笛の音幽かしき牧童の姿は、緩かに暢かな寧靜の平和の徵象に相應しい。春の芽生の交りなき幼心には斯うした墨繪をかりそめに見るのが什麽に嬉しかつたらう。

陽炎の仄紫に舞ふ京の大路を、しづ〳〵と軌る檳榔毛の車はいかに優美に、いかに尊貴に都人の眼を見送らしたらう。中なるは黄金の大刀を錦袍に反らした卿大臣か、あるは丈けなす黑髪を束ねて投げた御息所か、靄にも閃めく黑蠟の轅を兩側に黄絹白絹取交せた燃立つ紅の胸掛、腹帶、徐々と蹄を運ぶ、御所車を曳きつる牛の華さよ。物心つき初めて斯うした錦繪を見た時の羨望と憧憬

は、王朝の昔を偲ぶ毎にわが胸ぞ衝つ。

悠然として擾がす泰然として動せず、便々たる其巨腹は、萬象を容れて迫らざるが如く、茫乎たる其顏貌は、萬事を丁して超越せるがやう。語に曰く「大賢は愚に似たり」と。

あゝ牛よ、汝は愚なりや賢なりや。溫き家庭を放れて放浪の子となりし時、われは世の餘りに浮薄なるに驚きせせこましき小利口者の餘りに多きに呆れ果てた。

「渦牛角上の爭」てふ言葉は「島國根性」てふ文字と並んで、幾度かわが頭腦を搔き亂したらう。

沈重、滿を持して放たざるが如く泰山前に崩るゝも動ざるが如きの牛。一投足苟くもせざる如く强く地を踏んで、吃々として克く千里の遠きに行くの牛。あゝ汝は愚なりや賢なりや。

自らの不敏を恥ぢた私は「牛耳を取る」と云ふ語とともに次第に牛が好きになつた。

夏江生識

はしがき

此書もと傳說雜話を蒐むるにありて精細と適確を覓めしにあらず。其批判はこれを讀者の見る所に任せんのみ。

稿草し終つて甚しく其意に充たざるあるを覺ゆ、編者淺學不文の罪といへど、又本書の性質自ら然らしむるあるを了せられよ。增補改版を期す。

編輯に際し多大の援助を與へられたる。伴猪子、佐藤愛羊二君の厚意を謝す。

編者

目次

第一章　牛……(一)

牛の起原……(二)

牛の語義……「うし」の化名……牛の容貌……瑞西の湖水と牛の遺骸……シーザーの著書……我國神と牛……聖書と牛……印度と牛……支那と牛

原牛とは何ぞや……(六)

古代歐州に彌漫した原牛……グレメント七世の記錄

獰猛なりし野牛……(八)

野牛の獰猛……闘牛の慘……野牛の二種類……現在の家畜牛

東西文明の異れる牛の觀念……(二)

河川と耕耘……耕耘と牛……世界文明の二潮流と牛

西洋文明と牛……(一三)
豚は神聖なもの……羊は可憐なもの……牛は精力の象徴……産業革命と肉食
東洋文明と牛……(一五)
涅盤教と牛……白牛の謎……神秘と牛……悉達太子と牛……秘密佛教と牛黄……ヘブリューの古記録……大地乃ち牛
日本文明と牛……(二二)
日本牛の由來……内國牛の地方的繁殖……古書と牛の記録……天武、聖武兩帝の肉食禁斷……明治維新の肉食
本邦畜牛の分布狀態……(二七)
西牛部に多く東牛部に少し……分布の百分率……現在牛……人口と畜牛の割合……各國との比較
現存牛の種別……(三二)

但馬牛……南部牛……九州牛……琉球牛……ホルスタイン……ジェルシー、……エヤシヤー……短角種……デボン……シンメンタール……ゲルシツー……ブラオン、スヰス

第二章　神話傳說

牛は女性の象徴……(三九)
勇者は馬に聖者は牛に……生殖の神……牛馬と男女
自然傳說の牛……(四四)
牛の由來……牛に上齒の無き譯……角の曲つた由來……蹄の割れた由來……牛の乳房のこと……物言はぬ譯……牛と蠅
自然神話の牛……(四九)
天地創造と牛……シユピターとオイローパ……耶蘇が誕生の祝……牡牛の傳言……水車場の牛……七つの牛
牽牛織女の傳說……(五五)

物語ものの牛……（五七）
鬼童丸物語……智願上人……東大寺、關寺、善光寺、人牛に化す。牛に成つた蕩息子……

第三章　詩歌の牛……（七二）
黄庭堅、陸龜蒙、陳與義、文同、陸遊、楊萬里、載復古、吳澄貢、師泰、希文、澤庵禪師、龍泉禪師、嵐雪、其角、芭蕉、一茶、許六來山、其他俳句の牛、春夏秋冬

第四章　禪と十牛……（一〇七）
尋牛……見跡……見牛……得牛……牧牛……騎牛……忘牛……人牛俱忘……返本還原……入店垂牛……

第五章　故事俚諺……（一三六）
墨牡丹……頭牛彈琴……李牛黨爭……牛驥同皁……放牛桃林野……木牛流馬……汗牛充棟……割鷄牛刀……牛耳を執る……牛後……刀を賣りて牛を買ふ……寢た牛に茹かくる……女さかして牛賣りそこなふ……早牛も淀遲牛も淀三把つけて臥牛八把つけて起牛……老牛犢を舐る……牛を馬に乘りかへる……牛、を食小氣……牛は願から鼻を通す……丑の刻參り……牛の散……牛に乘つたのでドーとも云へね……牛追に時雨牛尿に火のついたやう……黄牛に衝れる……牝牛に腹つかれる其他……

第六章　牛に因める雜話……（一五六）
田單の火牛……木曾義仲の火牛……平安朝の牛童……牛頭天王の誓證文……赤穗義士と牛肉……埃及の木乃伊……櫻田變と牛肉……一休和尚と牛……牛と民間治療屠牛場の濫觴……牛市の起原……屠牛場で御經……牛車の車……江戸時代の牛車……大奥の丑待ち……農家の牛日待……牛追物……牛裂……天台大師と乳の五味……土用の丑と鰻……寒の丑と口紅……相場師の起丑……牛は貨幣……大秦の牛祭……向島の牛御前……牛疫よけの木幡神社……金澤の泥牛庵……小石川の牛天神……九段の牛が淵……麻布の牛小屋……漢の建相と丙吉牛……尙拍騎

牛……王章牛衣中に注く……寗戚角を叩て歌ふ……牽牛
邦語「うし」の諸解……富としての牛……美術の牛……舞臺
の牛……玩具の牛……うしに因める植物

第七章　牛拾遺……（三〇七）

邦語うしの諸説……富としての牛……牛血の功用……臓物の有用……美
術と牛……舞臺の牛……玩具の牛
うしに因める植物……（三一七）

附錄

明治肉食小史

牛に關する傳說雜話

舟木夏江編

第一章　牛の歴史

牛は詩的動物也

史學の見地よりして見るべく、牛は餘りにマテリアリックの感がする。併ながら牛を、科學的眼光によつて解釋せんは餘りにロマンチックの部分が多い。彼の容貌と彼の性質が語るが如く、其の經來れる進化の跡には奇しき自然の妙趣を遺憾なく發露して居り、要求と修錬の齎すものの爾く偉大なりやに驚嘆せしむるものがある。牛の歴史を仔細に索れば、測り知られぬ人生の挿話（エピソード）を得、牛の過去と現在と其所には活ける人生詩がある。牛は詩的動物である。

一、牛の紀原

ウシの語義

邦語の「ウシ」は漢字の牛を訓讀する。朝鮮語ではソ又はセウと云ふ。梵語ではウクシャ(Ukshа)と云ふ。

「ウシ」の化名

化名は「ベコ」(奥州地方)「ベブ」(九州南部)「コットイ」「ベヽノコ」(四國、中國)など、所によつて多少の訛を見る。蓋し羅典語の『ベクス』(Pecusより轉化したのだとの說がある。尙ほ牝牛を「オナス」犢を「ウシノコ」、閹牛を「キリキリウシ」と云ふは遍く人の知る所である。

動物學上の牛

動物學上では世界の牛類を十二種に分類して夫々の特長を擧げてゐるが、直接吾々に關係のあるのは家畜牛で、從つて單に牛と云へば家畜牛と見て差支ない。家畜牛は學名をボスタウルス(Bos staurus)と稱す、英語の(Cattle)は牛屬(Bos)の惣稱で、成熟した牡牛は

牛の容貌

Bull幼牛のことをSteerと普通に云つてゐる。Cowは牝牛で、其幼牛はHeiberなのだ。牡牛の哺乳期にはCalfとも云ふが之は敢て牛ばかりではなく、鯨や象や鹿の如き哺乳動物一般を通じての哺乳期を惣稱する名である。

牛族は雌雄共に洞骨一對を頭上に生やし皮膚には短毛密生して其色は白、黑、褐及び其斑色に限られ、尾は稍や長く先端に長毛を生じ、四肢は比較的短かく、第三第四の指趾は發達して其端に蹄を生じ、第一第五の指趾は發育稍や不良にして後側に懸垂し易い、食草動物の常として齒の發達は比較的鈍く上顎には門齒及犬齒が缺けてゐる。

現今ではOxを以て役用肉用の牛を呼んでゐるけれども、元來Oxは畜牛を意味する語なのである。

獨逸語では牡牛を Stier 若くは Bule と呼び、牝牛を Kuh と云ふ。牛をウルスといふのは羅馬人の付けた名で、ウルスは印度語でも歐羅巴語では根元と云ふ意味である。梵語では「ウリサ」、邦語の「うし」は此系統を引く。

瑞西の湖水に牛の遺骸

瑞西の湖水からは石器と共に飼牛の遺骸を發見したことがあるから石器時代には既に家畜として存在したらしい。「アブラハムは飼牛多くて富めり」とは創世紀にあるところ、基督の時代には餘程發達して既に財寶と見做れてゐることが分る。

シーザーの著書と牛

シーザーの著書にも、數多群をなしてヘルチニアの森に漂ひ象程の大きさを有したと書いてある、ヘブライや印度の古書にも牛に關する記事は溢れてゐる。

我國神代と牛

我國には神代の頃、既に牛馬の存在せし事は種々の記錄によつて識り得るけれども、其奈何なる種類のものなりしや固より茫漠として知る由もない。恐らく民族の移住と共に亞細亞大陸若くは濠州方面より移入せられたものであらう。

聖書と牛

創世紀の第八章にはアブラハムが、天の使を饗するに犢の肉を以てしたなどと書いてあり、肉食は疾くより發達したのは疑のない事實だけれど、果して何時の頃より西洋に行はれたかは審でない。

印度と牛

印度では極く古い時代から家畜として盛んに民家に養はれ、唯一の財寶として尊貴を蒐めた結果は、宗教的意味さへ加味して、神聖視するに至り、嵩じて肉食禁制の風を生ずるに至つた位である。

支那と牛

支那では五千年以前、已に神農氏人身牛首を以て帝位に上り廣

く耕作の用に供したとあり、武王に至つては、牛を桃林の野に放つて攻戰に從事した位であるから彼是を綜合して世界文化の跡に鑑みれば、日本は支那から支那は印度から、而して印度は野生の原牛を捕へて飼育し馴致したと見るのが至當らしい。少くとも印度乃至中央亞細亞は、他の總ての文明の發祥と等しく、牛種發祥の原產地と見ねばならぬ。

原牛は古代歐州に彌漫した

原牛とは何ぞや

原牛は學名を(Bos. Primigenius)と云ひ反芻類洞角料の牛屬に屬する英語の所謂Aurochsのことである。古代歐洲の全部に亙つて隈なく瀰漫してゐた動物であるが無論東洋の原始時代にも棲息してゐたに違ひない、現に第十五世紀の初め千四百十年頃、即ち今を

クレメント七世の記錄

去ること五百年以前に波斯邊には生存してゐた證蹟があると云ふ。これ等の原牛は、人類の蕃殖するにつれて次第に其領域を狹められ未開より未開、不毛より不毛へと、人煙稀薄の森林奥深く其影を隱すに至つた。而がも其森林も麓から麓と切り拂はるゝ遭遇しては、かれ原牛は終に生存の余地を見出し得なかつたのである。西歷千五百九十六年に法王のクレメント七世が、ポーランドに使者の送つた時の記錄の中には、ポーランド王は原牛を調理して一行を饗應したとある。饗應された原牛は保護の森林の產するところで、水分少く肉質硬しと隨員のポール・ムーカンは立派に書いて居る。これぞ今日の家畜牛の原種であつて、原牛が柔順で溫和で而も多大の貢献を人類になしつゝある家畜牛となるまでには、獰猛にして勇敢なる野牛時代を經てゐるのである。

野牛の獰猛

獰猛なりし野牛

今でも印度、亞弗利加、濠洲等の熱帶地方に行くと野牛が居る。野牛は怒れる獅子よりも猛烈に、狂へる虎よりも慓悍である。あの偉大な體驅に滿身の怒氣を罩めて縱橫無盡に荒れ狂ふ樣は、狩人の群をして膽爲めに寒き戰慄を覺へしむると聞く。

獅子や虎ならば幾ら怖ひと云つても、一度發砲されて其身邊に創傷を受けると、悲鳴をあげて山谿深く逃げ行き再び容易に其姿を見せないが、野牛は決してさうではない、一度は逃げるにしても再び捲土重來、眞に暴勇を奮つて報仇を忘れないさうだ。

西班牙の鬪牛と云へば有名な見物であるが隨分殘酷極るものださうな。あれは昔の羅馬の遺風で、動物の階級を餘り超越しな

鬪牛の慘

野牛の二種類

かつた當時の人間共が、牛と同等な生存競爭をするのを不思議に思はないで、牛を相手に力量の錬磨をやつたのが元である。鬪牛の光景を一瞥した者は皆な首肯するであらう、錐の如く尖れる角端を並べて、鋭どく突進する樣は猛虎一吼山岳鳴るの比ではない。野牛の獰猛を想像するのには鬪牛の咆哮を見るに若くはない。

野牛には二種類あつて、一は歐羅巴バイゾンと稱し、全身むく毛に掩れた角の非常に大きい身長は十尺もある見るからに獰猛さうな種類で、今では歐羅巴と露西亞の中間に位するリザーニヤとビーロウイツク山との唯だ二ヶ所の森林中に棲息するに過ぎない。各政府は其捕穫を禁じて種々の保護を與へて居る。今一つは亞米利加バイゾンといふので、歐羅巴バイゾンよりも頭蓋が巨

大で、頸から肩に掛けてむく毛のあるのは變りがない。北米の縱斷鐵道が初めて開通した當時は、屢々氣車を襲擊して、大きな角を揃へて苦もなく氣車を顚覆さすことも少くなかつた。ために米國政府は害獸として捕獲法を設くるに至つたことがある。

世界の牛種

右兩種の以外、現在世界に生存する牛屬としては、犛牛、カヴール牛、バンチン牛、犁牛、亞米利加野牛、阿弗利加野牛、印度水牛、タマラヲ牛、アノア牛を數ふる、要するに原牛と家畜牛との中間牛と見れば宜い。

現在の家畜牛

斯くして撫育馴致せられた現在の家畜牛は、漸次其獰猛慄悍なる原性を失つて、從順溫和にして勞役に堪ゆる動物とはなつた。其成長し進化した土地の氣候風土の影響を受けて樣々の型形體色を生じ、角の長いもの短きもの、其他中には全然角の無いのもある。併しながら是等の家畜牛は動物學上に於ては特殊の名稱を付せられてなく、同一種系の種々なる牛種として論ぜられてゐる。而して現存家畜牛の品種は普通其生產の土地の名稱によつて區別されて居る。

河川と耕耘と牛

二、東西文明の異れる牛の觀念

世界の文明史を一瞥すれば、沃野漠々たる平原の地が常に其先驅をなし、其平原には必ず之れに大河川の貫流するを普通とする。河川の貫流する所耕耘の業は先づ起らざるを得ない。耕耘のある所牛馬の使役せらるゝに至るは當然の徑路であらねばならぬ。農業のある所必ずこれに伴ふ牧畜がある。されば牧畜と文明とは離るべからざる關係を有するものであつて、若し夫れ自然の與ふる平原を下して、先天的文明の要素を具ふるものとするならば

牧畜は後天的に文明の先驅をなすものと云ふべきである。而して牧畜を論ずるものは先づ牛に指を屈する。牛と文明の關係茲に至つては自ら趣味の津々たるを覺へざるを得ない。

世界の文明を論ずるもの凡そ三個の潮流を說く、支那印度及び歐羅巴の文明輙ちこれである、印度文明は熱帶地力に於けるアールヤ人種の自然の發達を遂げしもの其產物として人文史上に佛敎があり、東方ツラン人種の總てを通じて思想上に多少の影響を與へざるはない。支那文明はツラン人種のそれを代表するものとして古來一種の面目を發揮し來りしもの、而して歐羅巴の文明に至つては、近世學術の進步と共に、東方思想の西漸を認むべき證左歷々として枚擧に暇あらずとは云へ、羅馬の野、希臘の海は燦然として近世文明榮光の源泉となり、其產物として、基督敎と近世科

學を有つてゐる。されば牛と文明を說かんにも勢ひ此三潮流を攀らねばならぬ。而して三箇の文明が、特殊の人文發達を遂げしが如く、自ら牛に對する觀念の夫々見解を無にするは又深く怪むに足らぬところである。

西洋文明と牛

基督が傳道の初め、エルサレムの殿堂に行つて見ると、宮の中には牛や羊が群をなしてゐた。其廻りては牧畜者と神官と入亂れてそれを賣買するのに忙がわしい。基督は其樣の淺間さしをを視て、苟くも神の前に仕ふべき身を以て賣人と伍して利を貪るは怪しからぬと、繩で鞭を作つて殿堂から牛や羊を追ひ散らして神殿の神聖を保つたと云ふ。又新約の路加傳の十五章には、放蕩息

豚は神聖なもの羊は可隣のもの牛は精力の象徴

子がひどく落魄して父の許に歸り、牛の番人にでもいゝから使つて呉れゝば宜いと内心思つてゐると、溫かひ新衣と新沓を與へられたばかりでなく生牛を屠りて饗されたとある。舊約の出埃及記には、モーゼがシイナ山に四十日五十夜の勤行をした時留守中自分の弟子を兄のアロンに托してゐた所が、アロンは其弟子達に犢の像を作つて拜せた、歸つて聽ひたモーゼは大ひに怒りて其像を壞はしたとある。一體聖書によると、豚は神聖なものとして取扱はれ羊は可憐のものとして愛されてゐるが、牛は精力の象徴として崇拜されてゐる。崇拜は受けてゐるが印度の如く食肉は禁じられて居ない。禁じられて居ないのみならず、東洋程迷信に囚はれなかつたゝめ、精力增進の具として旺んに肉食は發達した。殊に近世科學の發達に伴ふ產業革命は、勢ひ勞働時間の緊縮とな

產業革命と肉食

つて、一家團欒爐邊に繞んで食卓を共にするなんて悠長なことを許さないから、複雜で繁忙な西洋諸國では次第に、肉食飲乳等簡單にして滋養に富む乳肉を必需物とするやうになつた。歐米人の肉食を以て、牛の物質的能力を、功利的に利用したものと見るならば、印度、支那に於ける牛觀念は、頗る神秘的、宗教的の分子に富む事を是認しなければなるまい。

涅盤教と牛

東洋文明と牛

印度で牛を最も高尙の意味に使つたのは涅盤教に現れてゐる。釋尊が四方を傳道する途中、ある町に大きな富豪の家があつた。主人は外出して仕事をしてゐる内には數人の子供が嬉々として遊び戯れてゐた。ところが奈何なる拍子が其家で火を失してあ

わや烟々天を焦かす大火にもならんする有様となつた。そこで其家に住んで居たあらゆる生物、鼠や猫や犬やは悉く難を避けて其家を逃げ出し、たけれと、遊びに余念のない子供等は吾家の燒けるのも知らずに夢中で騒ひでゐた。變を聞ひて驚き急ひて歸つた父は、内に居る子供等に向つて、幾ら呼んでも出で來ない。矢張り夢中で遊んでゐる。父の氣は氣でない。何とかして外へ連れ出さうとして「今門の外で羊の車と鹿の車と牛の車とが來た。お前方を載せて行かうと云ふのだから早く出て來い」と云つた所が、果して皆んなが出て來た。「車は何處に居るのです」と子供等が問ふた時に「好い車をお前等にやる」と云つて、大きな白牛が、いとも清潔な身體を清めて、後ろには赤い幕を垂れ赤い蒲團を布いた善美を盡した牛車を輓ひたのを遣つた、子供は喜んでこれに乘つて避

難した。この話は白牛の車と云つて後代まで傳つた偶話であるが、白牛の白は純潔を意味し、大牛は平等の理想を意味する。つまり羊や鹿の薄志弱行に比して、牛の隱忍自重克く目的地に達するを湛へ、釋尊五十年の傳道を、牛の歩みに譬へたのである。

冥想に耽り易い印度人は、偉大な體軀を擁して播据する牛を見ては、其不思議な自然の力を考へずには居れなかつた。雌雄の牛を並べて、こゝに宇宙の最高原理の潜んで居るかの如くに思つたのも無理はない。天から降る雨を見ては牝牛の乳を垂らすやうだと譬へ、滔々たる大河の水を見ては、牝牛の群して歩むやうだと云つたのも、畢竟するに余程牛を以て偉大なる神聖な不可思議なものだと思つたからだ。殺生禁斷を戒律の中に加へた佛教徒が、此神聖視する牛に向つて殺戮の手を加ふるに忍びなかつたのは

悉達太子と牛

無理はない。されは印度では肉そのものよりも乳に關する逸話が多く。便々たる腹中を垂らす白汁はどんなに隨喜に體したであらうか。

昔悉達太子の伽闍尸梨沙山の林中に入つて、あるは一日一麻に難行を修め、あるは七日に一米を食りて苦行を積むの間、椰子は六度花を著けて六度實を結んだ。

肉は痩け骨は削るとも、未だ目差す彼岸の曙光だにも接し得ぬ苦行が解脱の途に非ざるを思つて、搖がしと組んだ幾年の座を立つて尼退禪河の畔に出て、奇削皚々たる雪山の麓を流るゝ切るやうな清水に浴して、苦行に汚れた身心を洗つた。衰へた氣力は倦怠を釀して汀の樹の枝に絶つて漸やくに岸に上つた。時たま修舍慢加村の長者の女子の難陀婆羅は樹の間に牛乳を搾りつゝあ

秘密佛教と牛黄

つたが今しも汀に上つた沙門を見て白乳を捧けた。太子は眞心置めた一杯の牛乳に身心茲に生氣付き、鋭氣茲に回復しと大屋氏釋迦にある、印度聖跡誌には佛陀涅槃に入るの前、準陀の供養を受けられし時、曰く凡そ我一生中我れ永刧忘る能はざる二種の供養を受けたり、一は曾つて我苦行處を去つて尼連禪河に浴せし時、牧女難陀婆羅の提げし牛乳にして、一は汝準陀の供養なりと言はれたとあるから、余程嬉れしかつたに相違ない。

秘密佛教には牛黄と云ふ文字を能く使ふ。これは牛糞を干して粉にしたので、雪山に生活する牛が雪山に生へた忍華草を食ふ、其神聖な食草から出來たといふので、牛糞が地上に達せぬ間に拾ひ取りて製するので、餘程貴重なものになつてゐるさうだ。尊敬すべき客人の寢室には、此牛糞を以て内壁を塗るのを禮儀とする

さうであるから、徹頭徹尾印度では牛を神聖視して祭り上げて居るものと見へる。麻奴法典に「喪、產後等の穢れを去るには牛尿を用ひよ」とあり、其清潔法中には「洒掃、牛糞塗、抹、牛尿撒布、牛蹄踏歩などの方式がある。

支那大古の英雄には人面鳥身だとか、人面鳥身だとか、動物の形を備へた人體の神は少くなく、神農民は牛頭人體として尊ばれて居る。神農氏が農業の祖神であることは廣く人口に膾炙せられたことで、開懇を敎へ、風雨を調和したことは諸書に見へてゐる。牛を神聖視した例は支那にも漏れない。

曾つて千八百五十七年から八年にかけて、印度人が英本國に向つて反旗を企てたことがある。其起りは印度人を兵士として訓練するに、兵營内での食物が面倒で仕方がないから西洋流に牛肉

を食はせやうとしたのを、何しろ神聖視する牛肉を食ふ事であるから彼等の反抗は非常なもので、左樣な慘酷なことをするのなら吾々は英國に反旗を飜しても團結して牛を食はぬと云つたのが元である。これを見ても印度人が如何に牛を神聖視して居るかゝ分ると思ふ。

シヤイヴァ派輙ち大自在天派の寺堂には必ず牛の石像が安置してあつて參詣者の崇拜は驚くべき多數である。牛の性質柔順にして農耕運輸の用を援け吾人の生活に寄與する所の多いのを以て、彼等の間には大地輙ち牛、地球乃ち牛の觀念を生ずるに至り、牛を以て生々化育の本源の如くに信じてゐるので、從つて牛を殺せば僧、父母、女人を殺害すると同等の極惡と見做し罪障は未來永劫消滅すべきものでないと信じられてゐる。今日と雖も印度敎徒

にして牛を屠るものはない。たゞに牛を屠らないのみならず牛を酷使するが如きあらば忽ちにして鐵拳の抱圍攻撃を受けると云ふことだ。

三、日本と牛

日本牛の由來

普通史家の論ずる所によれば、吾が大和民族は印度支那の人種、馬來半島の原人が黑潮に乘じて南部朝鮮及び西部日本に移入し來つたのだと云ふ。從つて吾が大和民族も其起源は矢張り世界人類の起源地と稱せらるゝ中央亞細亞から來たものらしい。日本牛が日本固有の土着のものでないことは各學者の一致するところであるが、果して何時の時代那邊から移入されたものであるかは審でない。牛に關する古書としての國牛十圖（延曆三年）駿牛繪詞（元亨三年）などの中には、筑紫牛、御厨牛、淡路牛、但馬牛、丹波牛、大和牛、河內牛、越後牛などの名を見るが、これ等の地方は疾くより支那朝鮮の各地と交通往來をした形跡があるのであるから、牛そのものは縱しや神代の昔、原始民族と共に孰れかの地方から移入されたものなるにせよ、今日の日本牛として耕耘に從ひ肉用に供せらるゝの牛は、必ずや支那牛若くは朝鮮牛の系統を引ひたものでなければならぬ。況して內國牛は琵琶湖以東に少くて關西殊に出雲を中心として山陰山陽の間に發達したるを稽ふれば、史家の眼に映ずる素盞嗚尊の故事と對照して、無稽の言でないと信ずる。近江牛の蕃殖は王朝以來支那交通の後と見るを至當とする。

內國牛の地方的繁殖

吉書と牛の記錄

「日本書紀」卷之六未節に、一書曰、云云是後天照大神復遣天熊大人（アメノクマノウシ）往看之、是時保食神（ウケモチノカミ）實已死矣、唯有其神之頂、化爲牛馬、顱上生粟、眉上

生、蠶、眼中生、稗、腹中生、稻、陰生、麥、及、大豆、小豆、」と記してある。保食神は食物の神、五穀の神であるから素盞嗚尊の驕勇に敵せずして征服せらるゝ所となつた其屍體に農耕用の牛馬と五穀が化生したとあるも面白いではないか、

日本で牛頭天王樣と云へば、防疫の神樣として諸所祀つてあるが、其祭神は素盞嗚尊だと言ひ傳へて居る。「古事記」や「書記」の紀する所から見ると素盞嗚尊を以て牛頭の神樣とするのは當らぬやうであるが、朝鮮でも素盞嗚尊を牛の神樣として祀つて居るさうであるから、思ふに怖しいもの貴ひものとして牛を見るの余り、無智なる古代人が牛と神とを結び付けた結果ではあるまいか。

古語拾遺には、大地主命が田を營る時に牛の贄を田人に喰して勞つたとあり。神后皇后三韓征伐のとき、捕虜となつて日本に來

た朝鮮人の記錄には、日本にて見ない獸類は、牛、虎、豹なり云云とある。

彼是綜合して考へ大國主神や神武天皇に對する記事に徵するも、其時代日本に於ては既に肉食に利用したのものらしく。殊に出雲風土記に「所造天下大神(大國主神)御子和加布都努志命、天地初判之後、天御領田之長供奉坐之」などとあるから愈々以て疑ない。

天御領田の長であつた命は、牛を使ふ術に巧みであつて部下多數の田人を敎導せられ。今尙ほ出雲大社の心の御柱側には、童神の牛を牽く像を安置して命が祀つてある。又昔から大社神領の內には牛飼免とて神領三石を定め置かれたと傳へらる。由來日本人の頭には牛を以て偉大勇猛の動物として尊崇した傾のあるのは印度支那の影響を受けたものであるが、更に宗敎的情調を加

天武、聖武兩帝と肉食禁斷

はへ祈願の對象にして居るなどの事柄は注意すべきところである。

其後天武天皇の四年に「牛馬犬猿鷄の宍を食する莫れ」との詔が出て、犯すものは嚴罰に處せらるゝ事となつたが、これは佛敎の殺生禁斷の法令に依つて定めたので、政敎一致の其頃では已むを得ぬ。又た聖武天皇の十三年に「馬牛は人に代りて勞役するものなれば曩に詔を發し屠殺を禁じたれども尙ほ犯す者あり百姓共のうちには密に牛馬を屠殺し其肉を鬻ぐと聞く、甚だ以て不都合なるに就き犯す者は以後見附次第嚴罰に處すべし」との再度の詔勅が下つた。以後明治維新前までは、牛肉は勿論一般獸肉の食卓に上ることは特殊の階級を除くの外は無かつた。縱し食つても煮焚は必ず屋外ですると云ふ風に頗る不淨ともものとせられ居た。

明治維新と肉食

牛乳の使用

併し上古時代には吾々日本人の祖先と雖も旺んに肉食をしたものであつて、この事の衰へたのは佛敎渡來唐制模倣以來の事である。

日本で牛乳を始めて用ひたのは孝德天皇の頃で、當時善那（ぜんな）と云ふものが、之れを搾取して堂上に奉つた時、天皇の御賞味ありて、善那には和藥使（やまとくすりのし）と云ふ氏姓を賜つた。其後朝廷では乳牛院を建立して乳牛を飼養し、牛乳を用られ、諸國には乳戸と稱する特別の民を認められたことは古史に現れるゐる。蓋し藥用の意味で、醫家と同じく仁者の術として取扱れたものらしい。

四、本邦畜牛の分布狀態

西牛部に多く東牛部に少し

分布の百分率

畜牛の分布狀態が人文發達の迹を示すに相應しきは曩に之を說いた。今本邦內地に於ける畜牛の分布狀態を見るに、概して西牛部に多く東牛部に少く、近江牛の產地たる滋賀縣を以て東西の分岐點とするは頗る興味ある觀察である。滋賀縣以東、東北諸國北海道を含めて其數僅かに二十四萬頭を數ふるに反し、滋賀縣以西卽ち中國四國九州を併して百三十八萬頭を示せるは、これ關西地方の農家は、土地と人口の割合に於て遙かに東北地方に比して集約的なるを以て、勢ひ畜牛を利用する集約的耕作主義に依るに至つた結果であらう、試みに東西分布の狀態を百分率に示せば之

東(琵琶湖以東)　百に對する十七、四

西(琵琶湖以西)　百に對する八十二、六

之れを一平方里に割當つれば

現在牛

	明治十六年	明治二十五年	明治三十五年	明治四十三年
內國種	一、〇八七、四七七	一、〇四三、七八九	一、一二六、七八七	九〇四、三六四
雜種	二、六六二	四一、二三四	一三四、七〇六	四五六、五四八
外國種	一、五三三	八、七八九	二〇、八八八	二三、二七一
計	一、〇九一、六六九	一、〇九四、七九九	一、二七五、三八一	一、三八四、一八三
內乳牛	二、三六四	二、三九八	二八、九〇一	五二、三八五

東(同上)　一平方里に對し十二頭三

西(同上)　一平方里に對し百九十二頭二

而して帝國統計年鑑の示す現在牛は

これ役、乳、肉の三用途中、役用、肉用は內國種を以て我國現在の要求に應じ得べも、乳牛に至つては外國種に及ぶ能はざるを以て、逐年內種種の減少を示すに反し、乳牛の增加を見るは乳用外國種蓄

反し殖の結果なるを知り得る。

更に屠牛の方面を見れば

明治十年	三三、九五四
同二十年	一〇六、六七三
同三十年	一五八、五〇四
同四十年	一五五、七一〇

乳牛は東に多い

而して最近四十二年度に於ては、成牛十七萬千六百五十二頭、犢牛七千頭にして、其肉量四千四百二十萬斤に達し、尙ほ遂年增加の趨勢を更めない、屠牛の數に於ても西部の七〇、四に對して東部は二〇、六の割合を示し。乳牛のみを以てせば東部の五六、二に對し西部は爾余の四三、八を示す。かく東部に消肉量の多きは東京、横濱、名古屋の大都市を控ゆるからで殊に東京附近は日本乳牛の中心をなしてゐる。即ち知る關西、中國は牛の生産地供給地であつて、關東一帶は其の消費地需用地たることを。

人口と畜牛の割合

日本の人口と日本の面積に對する畜牛數を比較して見ると、人口千人に對して約二十九頭、一平方哩に付僅か九頭にしか該當しない。

各國との比較

而して本邦現在の畜牛は約百七十萬頭を算するので、之れを全國一平方哩に割宛つる時は僅かに九頭當に過ぎぬ。然るに面積の廣大と人口の稀薄を以て知られたる露西亞に於てすら尙ほ一平方里廿一頭を數へ、更に人口の稠密を以て有名なる白耳義に至つては一平方哩につき實に百五十四頭を數ふ。

維新以來我國肉食は長足の進歩をなしたけれども、之れを各國の現狀に比較すれば未だ日を同ふして談すべからず、我國現在の

消肉量は平均一箇年一人に付二百八十八匁に過ぎざるに、比較的消肉量の僅少なりと稱せらるゝ以太利に於てすら一人に付二十六封度(約二貫六百匁)にして、其最も多きは濠州の一箇年一人二百七十六封度(約二十三貫とす、歐米各國の平均消肉量は一年約五十封度約六貫目)に上ると云ふのだ。

乳の需用に至つては、我國一ヶ年の平均は、一人約四合なるも、米國人一ヶ年一人の需用平均は五斗七升、卽ち本邦人の約百四十倍に相當せる有樣である。

現存牛の種別

本邦種卽ち和牛と外國種との著しい特長は、本邦種は外國種に比すれば體軀概して矮少で肉用としては廢棄部が多く、泌乳機關

但馬牛

南部牛

九州牛

の發達も不完全で乳量も少い、けれども肉質は頗る善良で纖維緻密に肉味又芳醇で外國種の及ぶところでない、重なる和牛を擧ぐれば、

△**但馬牛**　但馬を中心として丹波丹後因幡伯耆一帶の地に產す體色は概して黑く、體格は普通で多くは七八十貫、百貫を出ずるものは少い、背の廣い胸の張つた皮膚の美しい氣持の宜い牛で、肉味の優れたことは神戸牛と稱せられて殆んど獨步の觀がある。

一南部牛　青森附近の產の惣稱で、但馬牛に比べると體格はズツト巨大で、體色は同じく黑色本位であるが、黑白、褐白も尠くない。四肢の發達は至つて强健で駄役には最上だ。近頃外國種と交配して理想に近いものを產出しつゝあると聞く。

一九州牛　九州牛と云ふ中にも豐後の大分を中心として產する

琉球牛

ホルスタイン

るものは豊後牛、五島を中心とするものは五島牛として名が通つてゐる。豊後牛は、但馬牛よりは遙かに小に、性質は比較的獰猛で五島牛は豊後牛と大差がない。體色は矢張り黑か、黑白の斑に限れてゐる。

一琉球牛　球琉大島附近に產する。今より四百年前和蘭人が球琉に來往してホルスタイン種を交配した日本最古の牛種で、從つて體格頗る偉大であるが、段々に原型が退却したゝめか一種獨特の球琉牛を造り上げた。

外國種は其初め專ら乳牛改良の目的を以て極力奬勵せられた結果、逐年其數を增し最近に至つては混皿交配によつて種々の改良が行はれつゝある。

一ホルスタイン種　和蘭の原產でホルスタイン、フリーシアンとも云ふ。ジエルシーと共に乳牛としては世界第一と稱せられてゐる。泌出力高潮に達すれば一日優に二斗乃至二斗五升に及ぶ。體格は極めて巨大で、黑白の斑を以て全身を掩はれ(稀には茶白斑あり)頭は長くして狹く口は割合に大きい、毛は短く常に美觀を放つてゐる。

ジエルシー

一ジエルシー種　英國產にして、泌乳量に於てはホルスタインに及ばずと雖も、乳汁の濃厚なると脂肪分の多量なるは此種を推し、此種の十五石はホルスタインの二十石に比儔すると稱せらる。故に「バタ」用牛としては最適當で乳汁十五斤で「バタ」一斤を得られる。體軀は小で四肢は長く體色は帶灰褐色を主とし、間々濃淡の灰褐色を見る。口端大にして黑く周圍の樺色なるは此種の特色である。角は短少で突端が黑く、耳の肉面に鮮明な橙黃色を見る

は乳量豊富の徴だと言れてゐる。體質稍や弱く肺結核に罹り易い、を欠點とする。

一、**エアシヤー種**　蘇格蘭の產牛で、乳性も相當脂肪も四分以上乾酪製造に適する。此種の乳房は垂下せず乳頭も極めて小さい。體質は頗る强健で帶黃褐色、若くは帶赤褐色に白斑がある。角は小さく尖端上に向き鼻端稍々長狹、頸は細長く四肢亦短少、一日の泌乳量は一斗位。

一、**短角種**　ショルトホーン又はダルハム種と云ふ。バルチック海附近に產する早熟性の牛で生後二歲旣に成熟し其大なるものに至つては二百八十貫に達する肉牛中の王であるが乳用としても泌乳期限の長いので用ひらる。毛色は赤、赤白混合、純白が多い、角は固より短かく根元より尖端に至るに及んで次第に小さく少し上向く、眼は巨大にして額毛が多く全體肥滿を特長とする。欠點としては交尾受胎の困難と流產し易い所にある。

一、**デボン種**　英國の南北デボン州產、體質强健で從つて飼養容易である。毛色は赤褐色が多く、中に淡赤、濃赤色を見る。重に肉用で體重百五六十貫泌乳は一日三升位。

一、**シンメンタール種**　瑞西の西南方及び南獨逸に產する。體質は强健、毛色は淡黃色に白斑淡褐色又は淡黃色に白斑、淡褐色、赤褐色、にして牝牛は百四十貫から百七十貫、牡牛は二百貫から二百五十貫に上る。四肢長大にして牽用に適す。乳量一年十四五石乳質佳良、故を以て、役、肉、乳三用と稱せらる。

一、**ゲルンジー種**　英國ガルンジー及びヘルム諸島の產、乳用を主とし他は也ゼルシーと同型也。

一、**スイツ、ブラオン種**　瑞西南部に產す、肉、役用の牛で、體格は極めて强健、毛色は淡黑褐色、靑銅色を賞美する。

以上は目下我國產牛界に現存する重なる牛種であるが、近來は種々混血配合が行はれて居るが故に、微細に區分をすれば、甚だ多樣に分割せらるべきは固よりである。

第二章　神話傳說

一、牛は女性の象徵

農業と牧畜が人文發展の基をなしてゐるのは爭れない事實であつて、牧畜と云へば誰しも馬と牛とを聯想する。しかし牛と馬とは其形態性質を異にする如く、民間信仰に現はれたる傳說童話に於ても種々なる點に於て相異なつてゐる。寧ろ反對の傾向を以て居ることも尠くない。

由來戰爭には馬が附物である如く、牧畜には牛が附物である。碧空を仰ひて高嘶するは肥馬の領域であつて、若芽を友に春の霞に眠るは牛である。概して云へば牛は從順溫和質實神秘の物語に富み、馬は勇敢勁猛、華麗優美の談話に富んで居る。

勇者は馬に聖者は牛に

されば牛は宗教的傳說に現れ、馬は民間信仰に於て憧憬の的となり英雄傳說の勇士は馬に跨かるを必要とし緣起物語の聖者は牛に乘つてこそ其情味がある。馬は男性的であり、牛は女性的である。軍神と馬、牧畜牛と此兩者の連絡が東西を等ふして自然に此けじめの生じたのは面白い。

牛の平素は溫順だけれども一度憤れば、その猛烈さ疾風枯葉を捲くの概を以て目を遮るもの悉く紛碎せずんば止まぬ勢を示す。のは孔明三顧して出蘆し、高祖の業を成たその獅子吼にも比し得やう、默々として焦らざる牛にも憤怨の念はある。歐米の各牧場主が野生の牛を捕へて牧場に收容する時殊に注意して身體の各部を檢査する、萬一彈丸などの創痍を身體の一部にでも發見する時は直に其牛を除外すると云ふ。蓋し斯の如き牛は一旦靜穩に

生活しても時あつて發砲の響、創戟の閃きなど其舊怨を唆る機會に遭遇すると、態度忽ち一變して野生の昔に返つて牧場內に意外の擾亂を釀す惧れがあるからだ。

遙莫、原始時代の牛が頗る猛烈な動物であつて、古代民族に强烈な恐怖の印象を與へたことは爭れぬ。「山海經」に「東海中有流波山、入海七千里、其上有獸、狀如牛、蒼身而無角、一足入水、則必風雨、其光如日月、其聲如雷、其名曰夔、黃帝得之、以其皮爲鼓、橛以雷獸之骨、聲五百里、以威天下」とあり「黃帝內傳」には「一震五百里、連震五百里」とある。

これ等を綜合して考へて見ると、天地混沌、雲霧朦朧たりし大古開闢の當時は固より牛馬の區別のありやうがない。下つて種々なる時代の變遷を經るに從つて、牛馬の用途自然に分れ、今日の狀態を成したものと思はれる。

英雄の華々しい色彩が時代と共に凡俗化するのは、曾つて勇敢に勁健に猛ましかつた野性を包み去つた牛の馴致にも比し得る。淺瀬の流れは巖に激して飛沫を揚ぐれど、深淵に湛へた水は綿々たる靜寂を失はぬ。牛は進化を語り修養を語るのだ。

されば兩面的性質を有する牛は一面に於て威力の徴象である。牛の角は諸民族の神話の神の頭上に常に威力と尊嚴とを示してゐるではないか。

印度敎の生殖力の死神シバは、頭上に半月を載き其子ガネサも亦智慧の神として同一の附屬物を載いてゐる。月神カンドラは、新月の形を面上に有する壯年として、鹿に駕してゐる。古代「イラン族の聖典では、生殖豊滿の本源たる月神が「生種を藏する神」と稱せられてゐる。波斯中世の經典にも、牛の祖死して其種月に藏せ

らるとある。此牛祖の精か後に凡ての動物の生ずる源となりたのであるとも傳へらる。

又或る西洋の傳說によると、大昔希臘には「馬の人牛の人と云ふものがあつた。此時代は固より男女の區別のあらう筈がなく、子供を產むのは無論女子であつたけれど、それを哺(はぐ)み育てるのは男女共同樣であつた。衣服の裁縫(たち)、食物の調理など總て男女共々に其務に服した。然るに或る時戰爭が續ひて一家を擧げて攻伐のことに從事した。ところが女は筋骨が弱く力業に堪へないばかりでなく、毎月定つて月經があるので男同樣に寧日なしに軍旅の用を足すことが出來ない。其間には育兒衞生色々面倒臭い家用事も山程積つて來る。玆に男女間に自然に分業が出來て、男は出て戰爭に從事し女は家にあつて家事の整理することとなつたの

で。此時から男の事を馬に譬へて、女のことを牛に譬ふるやうになつた。牛馬の用の分れたのも此時からであると云はれてゐる。

二、自然傳說の牛

牛の由來　神は先づ天地を造つて人間を造つた。それから人間のために種々の動物を造つた。惡魔も亦神に眞似て羊と山羊と牛を造つた。併し惡魔の造つた動物は、凡そ赤とか白とか黑とかの單一色に限られてゐた。惡魔は亦人間を苦むるために種々の昆蟲害蟲を造つた。さて或る暑い暑い夏の日のこと、惡魔の晝寢をして居るのを幸に、これ等の昆蟲害蟲共が集つて牛に惡戲をした。神は其樣を見給ひて、牛を助けん爲に牛屋を建て、更に柳樹の枝を折つて牛の身體を磨擦し玉つた。すると今迄單一色であつた牛は忽ち變じて斑點を生じた。其時眼を覺した惡魔共は、此斑色の牛を見た時、自分の造つたものたることを知り得なかつたので神に取られて仕舞つた。さうして惡魔共は殘りの單一色の牛ばかりを引連れて去つた。（瑞典の傳說）

牛に上齒のない由來　昔、牛には上下に齒があつて、馬にはそれが無つた。或時牛がグデン〳〵に醉拂つて宴會からの歸り途に不圖馬と出會つた。馬は牛の醉つた振りが羨めしくなつて、自分も宴會へ行きたいから暫く上齒を貸して呉れと賴んだ。牛は溫和しいから馬の言ふまゝに上齒を貸してやると、馬は其儘其齒を返さなかつた。牛が請求をすると、自分と競爭をして勝つたら返してやらうと言つた。牛は迚も馬と競爭をして勝てる譯がない

から、其儘泣寝入りとなつてとう〳〵牛の齒に取られて仕舞つた。（安南地方の傳說）

昔、馬の頭には角があつて上齒がなく、牛には上齒と下齒とある代りに角が無つた。牛は馬を見て羨しがり、馬は牛の上齒が欲しかつた。そこで互に相談をして、角と上齒との交換をした。それで今日の樣な馬と牛とが出來上つた。（錫蘭島の傳說）

角の曲つた由來

角の曲つた由來　昔し下界の山が高さを增さなく成つて、人間は上界へ出る方法に困つた。其時に牛が來て角を出して呉れたので、人間は牛の角を傳つて上界へ出ることが出來た。その人間の重さで是まで眞直であつた牛の角は內側に曲つた。（亞米利加印度の傳說）

蹄の割れた譯

牛の蹄の割れた由來　ある仙人が獵に行つて鹿を射る積りで、誤つて牛の蹄を射た。傷は治つたけれども其時から牛の蹄は割れて仕舞つた。（北印度の傳說）

乳抗の事

牛の乳房のこと　牝牛の乳房は昔は澤山あつたけれど、猫に取られて數が減つた。猫が牛の乳房を悉く盜んで火の中に投じたのを、犬が見付けて漸やく四個だけを火中から拾ひ出して、牛に返してやつた。（芬蘭の傳說）

物言はぬ譯

牛の物言はぬ譯　牛も昔は人並に物を言つたものであるが、或時牛飼の童子が、牛を樹に繫ひて自分獨りは彼方此方を遊び廻つてゐた。そこで牛は怒つて、其晩其事を主人に告げた。主人は腹立て、其童子を懲しめたが、天の神は、泣ひて居る童子を最負にして、

其時から牛を物の云へぬやうに封じて仕舞つた。（安南の傳說）

牛の歩みの遲い

牛の歩みの遲い所以　人間が牛の力の強いのを利用して、無暗に重い荷物を背負せた。牛は重ひながら默つて背負つて歩ひたが、何時休ませて貰へるかと人間に尋ねた。すると人間は「何時になつたつて休ませるものか、死ぬまで働けば宜いのだ」と答へた。牛はそれを聞ひて「そんならモウ急くまい、早くても遲くても同じ事だ」と不平を言つた。けれども根が正直だから怒ることもせず、澁々ながら歩ひたから、其歩みが遲くなつた。（獨逸の傳說）

牛と蠅

牛と蠅　基督が牛飼に牛乳を所望したところ、牛飼が返事をしなかつたので、基督は牛飼を罰するために、蠅に吩付けて牛を責めにやつた。（白牙利の傳說）

天地創造と牛

ジユピターとオイローパ

三、自然神話の牛

天地開闢のはじめ、神も人も未だ生じなかつた以前、最初に生じたのは巨人族の始祖イミルで、其次に氷塊の溶解した中から自然に生じたのが、牝牛（アウヅムラ）である。此牝牛の乳房が四個の河流となつてイミルを育てた。昔の英雄豪傑が動物に育てられた話は、諸國の傳說に少くないけれども、天地開闢の神話に牝牛のあるのは北歐の神話ばかりである。（北歐神話）

天神ジユピターがシドンの王女オイローペ姫の容姿に迷つて、やさしい乳白色の牝牛に變じて姫に近づき、姫の乘るのを俟つて、

海中へ飛び込んで遠く姫を奪ひ去つた。（希臘物語）

耶蘇が誕生の夜

耶蘇が誕生の夜、厩の中で藁を敷いた上に馬と牛が寢かされて居るので、牛は遠慮して、耶蘇から離れて居た。馬は少しも遠慮をしないのみか、耶蘇の敷いたる藁までも食はうとした。マリヤは其を見て、牛を祝福して馬を呪ふた。（南方「スラヴ」族の傳説（佛、蘭、勃共通）

牡牛の傳言

耶蘇がベツレヘムの岩窟で生れた時、種々の動物が岩窟を訪問して、溫かい氣息を吹掛けて耶蘇の身體を溫めた。牝牛は丁度孕んで居て殘念ながら行くことが出來なかつたので、牝牛に傳言を賴んで、生れた仔牛を基督に贈る約束をして。基督はそれを聞ひて非常に喜んで、手を祝福した。（マルタ島の傳説）

水車場の牛

或時基督が巡行の途中、或河の岸へ來て馬に賴んで河を渡らうとしたが、馬は草を食つて居て暇かないと云つて應じなかつた。近くに居た牛は、氣の毒がつて自ら進んで基督を乘せて河を渡して呉れた。（露西亞の傳説）

二個の寺領の境にある水車場の主人が死んで、其墓地に就て甲乙兩寺の間に爭論が起つた。兩方共自分の領地に墓が造りたい所から、此爭論の裁判をペテロに賴んだ。ペテロは死人の死體を牛に負はせて、牛の行つた所に埋めるがよい、と裁判した。牛は主人の死體を負ふて境を越へて、甲の寺領内に入つて止つた。（佛蘭西の傳説）

七ツの牛

二年の後パロ夢ることあり卽ち河の濱にたちて、視るに七の美はしき肥たる牝牛河よりのぼりて葦を食ふ。その後また七の醜き瘦たる牛河よりのぼり河の畔にて彼牛の側にたちしが、その醜き瘦たる牛かの美き肥たる七つの牛を食ひつくせり。パロ是にいたりて寤む。彼れまた寢て再び夢るに一の莖に七の肥たる佳き穗いできたり、其のちに又たしなびて東風に燒たる七の穗いできたりしが、その七のしなだたる穗、かの七の肥實りたる穗を呑盡せり。パロ寤て見に夢なりき。パロ朝におよびてその心安からず人をつかはしてエジプトの法術士とその博士を皆こと〴〵く召し、之にその夢を述たり、然と之をパロに解うる者なかりき。時に酒人の長パロに告ていふ、我今日わが過をおもひいづ、嘗てパロその僕を怒て我と膳夫の長を侍衛の長の家に幽囚ひたまひし時、我と彼ともに一夜のうちに夢み各その解明にかなふ夢をみたりしが、彼處に侍衛の長の僕なる若きヘブル人我らと偕にあり、我等これにのべたれば彼われらの夢を解、その夢にしたがひて各人に明解をなせり、しかして其事かれが解たるごとくなりて我はわが職にかへり彼は木に懸らる。是に於てパロ人をやりてヨセフを召しければ急ぎてこれを獄より出せり。ヨセフすなはち鬚を薙り衣をかへてパロの許にいり來る。パロヨセフにいひけるは我夢をみたれど之をとく者なし、聞に汝は夢をきゝて之を解くことをうると云ふ。ヨセフパロにこたへていひけるは我によるにあらず神パロの平安を告たまはん、パロヨセフにいふ、我夢に河の岸にだちて見るに、河より七の肥たる美しき牝牛のぼりて葦を食ふ。後また弱く甚だ醜き瘦たる七の牝牛のぼりきたる。

其惡き事エジプト全國にわが未だ見ざるほどなり、その瘠たる醜き牛初の七の肥たる牛を食ひつくしたりしが、己に腹にいりても其腹にいりし事しれず、尙前のごとく醜かりき、我足にいたりて寤めたり。我また夢に見るに七の實たる佳き穗一つ莖にいできたる、その後にまたいぢけ萎びて東風にやけたる七の穗生じたりしが、そのしなびたる穗かの七の佳穗を呑つくせり、我これを法術士に告たれどもわれにこれをしめすものなし、ヨセフパロにいひけるはパロの夢は一なり、神の爲んとする所をパロに示したまへるなり、七の美牝牛は七年七の佳穗も七年にして夢は一なり、其後にのぼりし七の瘠たる醜き牛は七年にしてその東風にやけたる七の空穗は七年の饑饉なり、是はわがパロに申すところなり、神そのなさんとするところをパロにしめしたまふ。（舊約創世紀第四十一章）

牽牛織女の傳說

昔、長者の家の前に女洗濯をなし居るとき、一疋の蛇來りて女を嚇し、文章を長者に屆けしめけり。長者披き見るに、三人の娘を我に與へよ、若し否まんには父母を取殺さん。と書ひたりければ、父母歎悲み、三人の娘を招きて談じけるに、姉娘中娘共に諾はず、妹娘ひとり父母の命に代りて赴かんと云ふ。父母せんかたなく、蛇のいひおける池の前に家を作りて妹娘を置きて歸りけるに、夜中の頃に至り風雨烈しく浪高く起りて、十七間餘の蛇來り、我頭を切れと云ふ。妹娘瓜切刀にて切れば、美き男中より走出でゝ、此娘と契を結び……云々……

男語りけるは、我誠は海龍王にて空にも通ふことあり、此程また登るべしと云ひきかせて空に昇りけり。然るに姉娘たづね來り男の遺し置きたる唐櫃を開かしめしに、煙立昇りしのみ。三七日

をも過ぎたれど、天雅彦來らず。かの娘京の女の許に到り一夜杓を借りて空に昇り、途にて箒星等に路を尋ねて天雅彦の許に到る。天雅彦の父は鬼なりけるが、この娘を苦しめけり。やがて己が家へつれ行きて、日に千匹の牛を畜はしめて、晝は野へ出し夜は牛屋へ入れしむ。天雅彦己が衣の袖を解きて與へ「天稚彦の袖〳〵」と云ひて振らしめければ事なく仕遂げゝり。更にかの娘を蜈蚣の倉または蛇の城へ入れしが、いづれもかの袖を振りしによりて、蜈蚣も蛇も向ふことなし。今は爲ん術なく鬼も許して逢んこと月に一度ぞと云ひけるに、娘聞違へて年に一度と仰せらるゝかと云へば、さらば年々一度ぞとて、菰み投げうちたるが天の川となりて、七夕、ひこ星とて、年に一度七月七日に逢ふこととなりけり。

（近古小説解題）

四、物語ものの牛

日本の英雄には牛に關した話は餘りない、賴光四天王傳說の大圈に、

鬼童丸云々、鞍馬のかたへ向ひて、市原野の邊にて、便宜の所を求むるに立ちかくるべき所なし、野飼の牛の數多ありける中に、殊に大なるを殺して、路次に引伏せて、牛の腹をかき破りて、その中に入りて、目ばかり見出して待ちけり、賴光案の如く來りけり、淨衣に太刀をぞ佩きたりける。綱、公時、定通、季武等皆共にありけり、賴光馬をひかへて野の景色與あり、牛その數あり、おの〳〵牛追ふ者あらばや、と云はれければ、四天王のともがら我も我もとかけて射けり、誠に興ありてぞ見江ける。その中に綱いかゞ思ひけん、とがり箭

をぬきて死にたる牛に向ひて弓を引きけり。人怪しと見る所に、牛の腹の程をさして矢を放ちたるに、死にたる牛ゆす〳〵とはたらきて、腹の内より大の童打刀をぬきて走り出で頼光にかゝりけり。見れば鬼同丸なりけり。矢を射られながら、猶事ともせず、敵に向ひけり、頼光は少しも騒かず、太刀をぬきて鬼同丸が頭を打落しけり云云。(古今著聞集(武勇第十二)

大江山に聞へたる鬼が岩屋に著きにける、云々何とは知らず穴の内より凄じき面を出し覗く所を、公平飛掛つて捕へ引出さんとなしぬれば……鬼には非ずして但馬牛のしたゝかなるを掴み出す。……此松明の燃るに驚き猛つて虚空無量にかけ入たり。爰に内なるくせもの共、すはや事の出來たり、とみれば人あり、人かと見

れば、夕べの夜討にくたびれ、前後も知らず伏したる所に、例の牛飛入つて、虚空無量につきちらせば、數多の鬼共あはてふためき、或はばだかはだかの帯ぼかりにて駈出るやからもあり、又はうろたへ、胴は鬼の装束にて面を失ひ鍋をかぶり飛出る鬼もあり……かゝる所に盗人の大將天津早雲斬らるゝ事を悲み、牛の下腹に抱きつき、一散にかの牛を穴の内より乗出す。公平太刀振上げ、ちやうと斬れば、牛は虚空に駈出す。早雲は牛の下腹にしがみつきて出にける。公平碓井とび來り、おのれ如何なる者ぞと尋れば、某は盗人の大將にて云々……かの公平碓井が武者執行、面白きとも申許はなかりけり。(「公平武者執行」五段目)

と鬼童丸を眞似た物語がある。ある者は之れを、田單火牛の讎案であるともいふ。

「古今著聞集」に、「阿波國に智願上人とて國中に歸依する上人あり、めのとなりける尼死に侍りて後、上人の許に思はざるに、駄を一疋儲けたりけり。是に乗りて歩くに、道の早きのみならず、惡き道を行き河を渡る時も危きことなく、急ぐ要の事ある時は鞭の影を見ねども早く行き、のどかに思ふ時は靜かなり。事におきて難有く思ふさまなる程に、此馬程なく死にければ、上人惜み歎きける程に、少しも違はぬ馬出て來にければ、上人喜びて先のやうに祕藏して乘歩きけるに、或尼に靈つきて怪しかりければ、誰人の何事におはしたるぞと問ひければ、我は上人の御めのとなりける尼なり。上人の御事を余りに愚かならず思ひ奉りし故に、馬となりて久く上人を負奉りて、露も御心に違はざりき。程よく生れかへて侍りしかども、上人猶忘れ難く思ひ奉りし故に、又同じさまなる馬となりて今も此に侍るなりといふ。……執心の深き故に、再び馬に生れて志を現したる。甚哀れなり」となり。

「宇治拾遺物語」卷十二、「聖寶僧正渡一條大路事」に、

むかし東大寺に、上座御師のいみじきたのしみ有けり。露ばかりも人に物を與ふる事もせず、慳貪に罪深く見えければ、其時聖寶僧正の若き僧にておはしけるが、此上座の惜む罪の淺猿きにとて、わざと爭をせられけり。御房何事したらんには大衆に僧供ひかんと云ひければ、上座思ふやう、物爭して負たけらんに僧供ひかんも由なし。さりながら衆中にてかく云ふ事を何共答へざらんも口惜く思ふて、彼が取すまじき事を思廻して云ふやう、加茂祭の日、眞裸にて犢鼻褌ばかりをして、干鮭太刀に佩きて瘠せたる女牛に

乘て、一條大路を大宮より河原まで「吾は東大寺の聖寶なと」と高く名乘りて泣り給へ。然らばこの御寺の大衆より下部に至るまで、大僧供ひかんと云ふ。……その期近くなりて、一條富小路に棧敷うちて、聖寶が泣らん見んとて大衆集りぬ。上座もありけり。暫くありて大路の見物者其夥しくのゝしる。何事か有らんと思て、頭さし出して西の方を見やれば、牝牛に乘りたる御師の裸なるが、干鮭を太刀に佩きて牛の尻をはた〳〵と打て、尻に百千の童部つきて「東大寺の聖寶こそ上座」と爭ひし、て渡れ」と高く云ひけり。其年の祭には此を詮にて、そあり、ける。さて大衆各々寺に歸りて、上座に大僧供でかせたりけり。此事御門きこしめして、聖寶は吾身を棄てゝ人を尊く者にこそありけれ、今の世にいかでかゝる貴人ありけんとて、召出して僧正までなし上げさせたまへり。

日本に於ける佛教的緣起物語の中で、最も有名なのは關寺の緣起と善光寺の緣起に見る、

「今昔物卷」卷十二「關寺駈牛化迦葉佛語第二十四」に、

今昔、左衞門の大夫平朝臣義僧と云ふ人有けり、其文は中方と云ふ。越中守にて有ける時、其國より黑き牛一頭得たり、中方年來此に乘て行く程に、清水にて相知れる僧の有るに、此牛を與へつ。清水の僧、此牛を大津に有る周防椽正則と云ふ者に與へつ、然る間、關寺に住む聖人の關寺を修造する間に、此聖人雜役の空車を持て牛の無きを見て、正則此牛を聖人に與へつ、聖人此牛を得て喜んで車に懸け、寺の修造の材木を引かしむ。材木皆引畢て後に、三井寺の明尊前の大僧正にて、夢に自ら關寺に詣づ、一の黑き牛あり、堂の前に繫ぎたり、僧正此は何の牛ぞと問ふに、牛答て曰く、我は此れ迦葉

佛也。然るに此關寺の佛法を助けんか爲に、牛と成て來れる也と云ふと見る程に夢覺めぬ。僧正嬉んで、明る朝に弟子口僧一人を以て關寺に遣る。敎へて曰く、若し寺の材木引く黑き牛や其寺に有る、と聞て來れと、僧關寺に行て、卽ち返來つて曰く、黑き大なる牛の角少し平みたる、聖人の房の傍に立たり。此は何の牛ぞと問へば、聖人の曰く、此等の材木引かんが爲めに儲けたる牛也と、僧返て其由を僧正に申す。僧正此を聞き、驚き、貴みて、三井寺より多くの仕事無き僧共を率ゐて、……恭敬禮拜する。

榮華物語には、

「此頃聞けば逢坂のあなたに關寺と云ふ所に牛佛現はれ給ひて、萬の人まゐり見たてまつる。年頃此等に大きなる御堂をたて、彌勒を造り据へ奉りける。摶えもいはぬ大木どもをたゞ此の牛一つして運び上ぐることとしけり、哀れなる牛とのみ御寺の聖思ひゐたりける程に、寺の傍に住む人ありて、明日使はんとて置きたりける夜の夢に、我れは迦葉佛なり、此の寺の佛を造り堂を建てさせんとて、年比するにこそあれ、たゞ人はいかでか使ふべき、と見たりければ、起きて、かう〳〵の夢見つると云ひて思ひさわぐなりけり、牛も黑くてさゝやかに、をかしげにぞありける。入道殿を初め奉りて世の中におはしける人、參らぬなく參りこみ、萬の物ぞ奉りける。たゞ御門、春宮、みやみやぞ得おはしまさゞりける。此牛佛、何となく心地惱しげにおはしければ疾く失せ給ふべきとて書く人參りこみて、其聖に夢に見えたる迦葉入涅槃のだんなり、いざ當得結緣せよ、とこそ見えたりければ、いとゞ人々まゐりこむ程に、歌よ

む人もあり、

和泉

きゝしより牛に心をかけながら
またこそあえねあふ坂のせき

人々あまた聞ゆれど同じ事なれば書かず、日頃此御像畫せて六月二日、其御眼に入れんとしける程に、其日になりて此御堂を此牛見めぐり歩きて、本の所に還り來て、やがて死にけり、これ哀れにめでたきこと限りなし、御像に眼入れける折ぞ果て給ひにける。聖いみじく泣ひてやがてそこに埋めて念佛して、七日々々に經佛供養しけり、後にこの畫し御像内にも宮にも物ませ給ひける。かゝることこそあれ、眞の迦葉佛、此同じ日ぞかくれ給ひける。」

沙彌玄棟の「三國傳記」卷三〇第十四に、

善光寺

人牛に化す

漢曰、預州口有一老女唯神道を事として、不信三寶、時の人其名を稱神母邪見覆心にして、寺塔の邊にも不往、剩路を行くに、比丘僧に遇へば目を掩ふて過ぐ。或時黄牛一頭女の門に在り、不去こと三日なり、更に主の尋ねなし、神母自ら謂へり、是れ神の助け與ふる處なりとて、自ら牛を叱て家に歸らんとするに、牛不隨、女衣帶を解き牛の鼻に繫て牛を牽く、牛力强くして牽合ふ程に牛佛寺の内に入る。女人惜牛及帶故に眼を掩ひて寺に入り、背本意て立てり云云

大和國添上郡山村の里の人方廣經を轉讀せしめんとて僧を請ず、僧其の家の衾の美なるを見て夜に乘じて之れを奪ひ去らんとせしに暗中聲あり、盜むこと勿れと云ふ、驚て就ひて之れを見るに只牛あるのみ、還てまた寢ぬ、夢に牛來りて曰く、吾は此主人の父な

り、嘗て人に與へんとて告げずして子の稻ナ束を取れり故を以て此の如し、其の實を知らんと欲せば明日座を設けよ、吾直ちにこれに上らんと云ふ、僧乃ち主人に告ぐるに此事を以てし座を設けて牛を牽くに牛直に進みて此上に就けり、(今昔物語)

牛になつた放蕩息子

殿樣の家來の息子が、博奕を打つて、お金を使かつて仕樣が有りません。一人位なら未だ可いのですけれど、家來どもの息子が皆揃つて博奕を打つて毎日々々酒を飲んで遊んでばかり居ますので國中の若い者が眞似をして仕樣が有りません。

家來は大層心配をして、各々自分の息子を呼んで、幾度も、幾度も云つて聞かせましたけれど、惡い癖は中々止まないもので、少しも効能が有りません。

家來たちは困つて了つて、殿樣に相談を致しました。

其處で殿儀は、博奕を打つ息子を一人殘らず呼んで、貴樣たちは親の云ふ事を聞入れずに、毎日毎日酒を飲んで博奕を打つて遊んでゐると云ふのは怪しからぬ不屆者だ。貴樣たちが惡い事をするから、國中の若い者が、眞似をして、仕樣がない。可哀相だけれども、今日から貴樣たちを、牢へ打込むから、其通り心得て居れ、」と仰しやいました。

息子たちは其を聞いて吃驚して、慄へ上つて、『此から屹度心を改めて、よい人間に成りますから、今度だけどうぞ許して下さい』と願ひました。

『屹度か』と殿樣が仰しやいました。

『屹度改めます。若し又惡い事を致しましたら、その時は牛に成

つても、構ひません』と皆が申しました。

其處で殿樣が許して下さいました。

其から三日ばかりは息子たちも惡い事をせずにゐましたけれど、四日目に成ると最う博奕をはじめて、大勢寄つて酒を飲みました。

豫ねて殿樣から、役人に申付けてありましたから、役人が息子たちを見つけ出して縛つて參りました。

殿樣が其を見て『皆裸體にして、頸に繩をつせて、四這に這はせて町中を引廻して、それから牛市場へ連れて行つて、値段をつけて繋いで置け』と役人に申付けなさいました。

役人は其通りに、息子たちを殘らず裸體にして、頸に繩を附けて四這に這はせて、町の中を引張り廻しました。牛に成つたのでありますから牛の眞似をせねば成りません。立たうとすると、鞭で叩かれますから、立つ事が能きません。町の者が其を見て大層笑ひました。

役人は此牛を牛市場へ連れて行つて、高い値段を書付けて繋いで置きました。僞物の牛で、少しも役には立たなくて値段ばかり高いのでありますから、誰も買ふ者が有りません。到頭おしまひにお父さんたちが來て、買つてつれて歸りました。

息子たちは最う懲々して、其時から博奕を止して、善い人間に成りました。（朝鮮俚話）

王者の概
君子の風

第三章　詩歌の牛

牛が利用厚生の動物として吾々人類を裨益しつゝあるは今更呶々を要せざるところ。一毛一皮の微に至るまで不尠貢献をなしつゝあるは他動物の遠く及ばざる所なるが、更に其一面に於て悠揚迫らざる王者の態度と、掬躬如たる君子の温厚を備ふるの風丰が、如何に吾人の詩趣を挑するであらうか、されば古來より牛は詩歌の題目として謠はれたるもの決して尠くない。ある者は嬰兒の慈母に接する思を以て、ある者は宇宙の最大權威者に接するの情を以て、又ある者は崇高諄美の自然物を憧憬するの意を以て、彼が人類と、古き因由を有するだけ、それ丈け深く人心に刻み込まれて居る。

「五言古詞」

題竹石牧牛　　宋　黄庭堅

野次小聯嶸　幽篁相依綠
阿童二尺箠　御此老觳觫
石吾甚愛之　勿遣牛礪角
牛礪角尚可　牛鬬殘我竹

放牛歌　　唐　陸龜蒙

江草秋窮似秋半　十角吳牛放江岸
鄰肩抵尾乍依偎　横去斜奔忽分散
荒陂斷塹無端入　背上時々孤鳥立
日暮相將帶兩歸　田家煙火微茫濕

題牧牛圖　　陳與義

千里煙草綠　連山兩新足
老牛抱朝飢　向山影黛觫
犢兒狂走先過浦　却立長鳴待其母
母子爲人實倉廩　汝飽不慙人愧汝
牧童生來日日娛　只憂身大當把鋤
日斜睡足牛背上　不信人間在黃輿

題竹石牧牛　宋　黃庭堅

野次小崢嶸、幽篁相依綠、阿童三尺箠、
御此老黛觫、石吾甚愛之　勿遣牛礪角

牛礪角、尙可　牛鬪殘我竹。

毛老鬪牛　宋　文同

牛牛爾何爭　於此輒鬪怒　長鞭鬪兒童
大炬走翁嫗　蒼蒼八九子、　駭立各四顧
何時解角歸　茅舍江村暮。

放牛歌　唐　陸龜蒙

江草秋窮似秋半、　十角吳牛放江岸
鄰肩抵尾乍依偎、　橫去斜走忽分散
荒坡斷塹無端入　背上時時孤島立
日暮相將帶雨歸　田家煙家微茫濕

遊昭牛圖　宋　陸游

遊昭木石師李唐、　畫牛乃是其所長、
出欄切聽一聲笛、　意氣已無千頃荒、
客居京口老益困　夜不揜脛鬚眉蒼、
時時弄筆眼力健　蹄角毛骨分毫芒、

我無沙隄金絡馬、　拂拭此幅喜欲狂。
乞骸幸蒙優詔許　置身忽在煙林傍、
日落飲牛水滿塘、　夜半飲牛天雨霜。
俚醫灌藥美水草　老巫呵禁拔不祥。
願我孫子勤農桑、　願汝生犢筋脈强
碓聲驚破五更夢、　歲負五粒輸官倉。

宋　楊萬里

安樂坊牧童

前兒牽牛渡谿水、　後兒騎牛回問事、
一兒吹笛笠簪花、　一牛戴兒行引子
春谿嫩水清無滓　春洲細草碧無瑕
五牛遠去莫管他　隔谿便是群兒家
忽然頭上數點雨　三笠四簑趕將去

春郊牧養圖

宋　載復古

我之居元在野、　平生慣識牛羊者
今見蒲江出此圖、　半日不知渠是畫
一犍前當轉頭立、　一犍渡浦毛猶濕
中有一蒼騎以牧、　牯牸相隨數十足
殿後兩枚黃穀觫、　分明如活下前坡
路轉山南春草多、　耳根只欠牧兒歌

題牧牛圖

元　吳澄

樹葉醉霜秋草萎、　童驅穀觫涉淺谿、
一牛先登甜犢背　犢毛濕濕猶未晞
一牛四蹄俱在水、　引脰前望喜近隄
一牛兩脚初下水、　尻高未擧後兩蹄、

前牛已濟伺同隊回身向後立不移、
一牛將濟一未濟直須並濟同時歸
此牛如人有恩義人不如牛多有之
人不如牛多有之笑問二童知不知

題牧牛渡水圖　元貢師泰

兒騎牛兒騎牛　兩牛渡水當中流
一牛帶犢臨沙洲　沙洲泥深沒牛足
中流浪高拍牛腹　長繩墜手衣裏身
前者起顧後俯伏　牛背欹傾不自由
誰云穩比萬斛舟　待兒出險走平地
畫圖忽落東海頭　東海頭飯牛之子曾封侯。

飯牛歌　元供希文

牛吒吒跢趵趵、枯其芻盡芳草綠
自哺薄夜不滿腹　擷朶作糜豆作粥
飼飢飲渴兩已定、脫絆解銜就茅屋
不愁飢腸雷轆轆、風簷獨抱牛衣宿
丁男長大牛有犢　明年添種南山曲。

牧牛圖　元貢性之

谿童飲牛渡谿水　牛過水深行復止、
人知水深牛不行　誰識回頭顧其子
桃林之野春雨晴　燒痛回綠春草青
太守勸農當二月　土膏肥煖牛可耕
邯鄲城頭征戰息　甯戚徒勞吟白石
一聲笛裏太平歌　牛背谿童自朝夕。

牧牛詞

町高啓

爾牛角彎環　我牛尾禿速、　共拈短笛與長鞭
南龍東岡去相逐　日斜草遠牛行遲
牛勞牛飢惟我知　牛上唱歌牛下座
夜歸還向牛邊臥　長年牧牛百不憂
但恐輸粗賣我牛

題牧牛圖

明張以寧

返照在高樹　歸牛度層坡
一犢牟然赴其母　老牸返顧情何多
牧兒見之亦心惻、　人間母子當如何
日暮倚門烏尾訛。

「五言律詩」

牛

唐李嶠

齊歌初入相、　燕陣早横功　欲向桃林下
先過紫樹中　在吳頻喘月　奔夢屢驚風
不用五丁土　如何九折通。

鐵牛廟

元廼賢

燕人重東作、　鎔鐵象牛形　角斷苦花碧、
蹄穿土鏽腥、　遺蹤傳野老　古廟託山靈
一醉壺中酒　穰穰黍麥青、

「五言絶句」

將牛何處去

唐元結

將牛何處去、　耕彼故城東　相伴有田父　相歡惟牧童。

代牛言　唐　劉叉

渴飲潁川水、餓喘吳門月、黃金如可種、我力終不歇。

牧童　宋　葛長庚

揚柳陰初合、邨童睡正迷　一牛貪草嫩、喫過斷橋西。

畫牛　唐　僧大訢

草煖犢子肥、牧間牛耳濕、誰知荷蓑翁、風雨租稅急。

牧牛圖　明　錢宰

野老春耕歇、谿兒晚牧過、夕陽牛背笛、强似飯牛歌。

雨澗牛　明　僧如蘭

谿岸野橋橫、烏犍帶犢行、無人掛書讀、雨外候春耕。

「七言絕句」

春日田園雜興　宋　范成文

騎吹東西里巷喧　行春車馬鬧如煙

繫牛莫礙門前路　移繫門西碌碡邊

冬日田園雜興

乾高寅缺築牛宮　巵酒豚蹄醉土公

牯牸無瘟犢兒長　明年添種越城東

買牛　宋　陸游

老子傾囊得萬錢、石帆山下買烏犍、

牧童避雨歸來遲、笛春風草滿川。

過大皐渡　宋　楊萬里

隔岸橫州十里青、黃牛無數放晴

船行非與牛相背　何事黃牛却倒行。

題江貫道百牛圖　宋　白斑

幾年散放桃林後　餘四百蹄猶可騎
攢鏡持書多事在　能騎惟有一凝之

老牛　宋　宋元

草繩穿鼻繫柴扉　殘喘無人問是非
春雨一犂鞭不動　夕陽空送牧兒歸

牧牛圖　元　貢性之

郊原春草綠茸茸　牛背如舟臥牧童
自是太平新氣象　錯將畫意屬良工

題野老醉騎牛圖　明　錢宰

郫田樂事事老來稀　記得江南春社時
兒女醉扶黃犢背　帽簷顛倒插花枝

題畫牛　明　僧普慈

林下逍遙飽則眠、　何人能似爾安然
因思昔日陶弘景　金作籠頭不易牽

寒山詩名句拔抄

兩龜乘犢車、　蓊出路頭戲。
田舍多桑園、　牛犢滿厩轍。
蚊子釘鐵牛、　無渠下背處。
土牛耕石田、　未有得稻日。
不學田舍翁、　廣置牛莊宅。
不知自償債、　卻笑牛牽磨。
作債稅牛犂、　爲事不忠直。
丈夫莫守困、　無錢須經記、　養得一牸牛、　年存五犢子、
犢子又生兒、　積數無窮己、　寄語陶朱公、　富與君相似。

拾得詩

壯士志氷絨、羈猴騎土牛。

六牛圖

自得禪師

始從知識示誨起信心　信心既萌、永爲道本　故牛首上一點白、

一念信爲本、千生入道因、自憐迷覺性、隨處染埃塵、

野艸時々綠、狂花日々新、思家無計得、但覺淚沾巾、

信心既闡、念々楷薗、忽尒發明、心生歡喜、最初入頭、放頭全白、

問訊這牛兒、知非何太遲　拋家經幾刼、逐妄許多時、

念々歸無念、思々純所思　入頭從此始　次第證無爲

既有發明、漸々熏煉、智惠明淨、未能純一　將白牛身

看牧幾春秋、將成露地牛

出離芳艸去　向近雪山遊、正念雖歸一、邪思尚混流、

迹然心迹盡、六處不能收　清淨湛然、通身明白、

更無妄念　唯一眞心、了然無繫屬　明淨絕纖埃

六處不能該　優曇火裏雨　迢々空刼外　佛祖莫能猜

繩索將無用、人牛安在哉　永超象外　唯一空々

心法雙忘、人牛俱泯

是名大解脫門　佛祖命脈

人牛消息盡　古路絕知音　霧卷千嵩靜　苔生三徑深

心空無所有　情無不當　今把釣翁何在　磻溪鎖綠陰

命根斷處　絕後再甦、隨類受身　逢場作戲

只改舊時人、不改舊時行履處

妙盡復窮通　還歸六道中　塵々皆佛事　處々是家風、

皓玉泥中異　精金火裏逢　優游無間路　隨類且飄蓬

鐵牛　一休純禪師

生鐵鑄成生鐵牛　戴嵩筆下總難收
從來擎出黃金角　今日山中添一頭

水牯牛　天祐暇禪師

安居三月事如何　水牯牛兒還見麽
欲識鷲山無限意　野村烟雨綠楊波

牛渡水國　龍泉禪師

溪澗東西歸國王　中流浮鼻浪花揚
一毫端上甚奇妙　水草縱橫惣不妨

石牛　無門開禪師

須明爲骨露纖軀　頭角崢嶸塞太虛
大地耕鑱無寸土　牧童鞭索豈能拘

懈牛　同

不經南舊與西阡　犂把年來怕上肩
棄卻欄中肥嫩艸　綠楊提畔飽風烟

扇面牧牛　義堂禪師

綠楊如水草如裙　牛飽童飢未到村
落盡夕陽歸去晚　應乘初月認柴門

群牛　澤庵禪師

群牛遍野志區々　水綠艸青日欲晡
眞見僞嶠百年後　頭々悉是師祖軀

全牛　龍泉禪師

水牯元來作麽形　披毛戴角鐵身心
庖丁不會渾崙句　放下屠刀力勞再吟

牛圖　　澤庵禪師

西風一轉葉飜空　無影樹邊逢露牛
端的正音落誰耳　野青日暮忽號牟

泥牛　　白雲曉禪師

頭角崢嶸鼻遼天　春風影裏自安眠
直饒瀉老難牧處　鬪入海門明月前

畫牛　　古劍快禪師

元來不借載嵩手　放出瀉山水牯牛
水草四時何喫著　倒眠橫臥在牀頭

題牛　　佛光國師

頭角森森彌宿霧收　一聲桐角下林丘
更看轉步移身處　狼籍春風百草頭

溪東草色肥、溪南柳垂線　日暖春正遲　騎牛過西岸。
芳草帶輕煙　蹄踪半缺圖　鞭牛那邊去　春雨足高原

秧氷綠抽針　中橫古木陰　一聲桐角響　農事覺春深

百單頭邊獨露身、雖然放口不傷根
今朝不許明朝事　夜雨還青奮齧痕　　澤庵禪師

牛脊吹笛圖

乘得鐵牛百自由、心心隨境實能齒　一聲橫笛吹收着
柳綠艸肥春水流

童子駕牛

野外肅然童駕片　鴻荒天地萬殊秋
一聲橫笛山將暮　和月何人聞倚樓

春

初空や烏をのする牛の鞍　嵐雪
庭竈牛も雑煮を居りけり　其角
雑煮　惠方からひくやことしも牛の王（自賛）　芭蕉
惠方　牛馬の物喰ふ音や民の春　蓼太
民の春　逢坂や牛の骨折る春の雨　許六
春雨　寒に喰ふ牛のあぶらや春の雨　同
春雨や降るともしらず牛の目に　來山
春風　春風や堤としたる牛の聲　同
春風や牛にひかれて善光寺　一茶
春月　忘れ來し牛の荷物や春の月　里庵
鶯　鶯や牛を叱れば飛んで行く　普成

虻　牛買は愚にして虻に牛されける　卯三郎
鍛入　鍛入や牛合點して大原まで　堤亭
出代　飼牛の尻も洗ふて出代りぬ　一盛
蕨折　預け置きし牛見廻りぬ蕨折　小魚
耕作　我心牛の心と耕すぬ　櫻魂子
畑打　耕牛の水に尿する田面かな　椽面坊
牛を桃林に放ちて畑打　木外
牛つなぐ並松あるや畑打　碧梧桐
梅　里の子よ梅をりのせて牛の鞭　芭蕉
此梅に牛も初音と鳴つべし　同
梅が香にひかれてきませ牛天神　望一
葛飾や牛のにほひも梅の花　鳳朗

桃

匂ふらし梅さく里の牛の角　句空
野鳥は牛にとまるや梅の花　淡々
野の梅や折らんとすれば牛の聲　鳴雪
紅梅や左府の大臣の牛車　同
桃さくや牛のよたれもやまと歌　蓼太
喰ふて寢て牛にならばや桃の花　蕪村
すね牛を桃の村人笑ひけり　師人

柳

牛が子を生みし祝や桃の宿　梔子
闘牛の角磨ぐ桃の主かな　龍城
胴をかくし牛の尾戰ぐ柳かな　素童
吹く風に牛のわき向く柳かな　杏雨
青柳や門にはふるき牛の鞍　雪窓

山吹

挙け牛に物見高なり野の柳　六花
山吹に牛の尾をふる道もなし　荻子
山吹や牛だまされて芹生まで　成美

菫

そこらひく牛もなつかし菫草　蓼太

若草

若草はねぶる計そ牛の舌　逸名

花、櫻

牛の綱も香にひかるゝや花車　利清
牛の尾に髪はねつけて姥櫻　堤亭
衣笠に牛のあくびや山ざくら　野洞
日よりよし牛は野に寢て山櫻　鬼貫
花に酒汗して牛の曳く日かな　蓼太
牛の角すぼめて通れ花の中　鳴雪

夏

暑

日の岡やてがれて暑き牛の舌　匹秀

牛も笛もなき草刈の暑さかな　也有

立合て牛賣る軒のあつさ哉　探芝

涼

淀鳥羽の牛に帆かくる暑さ哉　知足

涼しさよ牛の角振て川の中　萬乎

牛泥む老の齒かみや橋涼み　其角

曉を牛さへすゞみ車かな　同

祭り

牛馬のこゝろもしりぬ夕すゞみ　蓼太

猶遲し祭り戻りの牛の足　幽也

田植

牛叱る聲も苦しき田植哉　嘗車

筏

川簀垣牛の子とりのいかだかな　楓子

五月雨

牛もなし鳥羽のあたりの五月雨　一髪

夕立

夕立やはなれて牛の門ちがへ　李下

夕立に動せぬ牛のまなで哉　木導

夕立に下りても行かず牛の主　吏登

下闇

下闇や牛の御前を腹へらし　百里

時鳥

郭公牛に乘てやもどり脚　吟司

螢

牛部屋に書見る草の螢かな　言水

蠅

苦しさや笹葉かけ行牛の蠅　九節

菖蒲

角まいて牛のきほひやあやめ草　一境

牡丹

農牛の百匹もとる牡丹かな　大江丸

眞菰

牛の子にかはゞ角くむまでも哉　德元

葵草

葵草かゝれとてしも牛の角　言水

畫顔

畫顔は牛の喰ほど咲きにけり　成美

凌宵花　牛も仰ぐ牧の一樹や凌宵花　飛泉

合歡花　乳牛の角も垂れたり合歡の花　碧梧桐

夏草　夏草にわりなき牛の乳房かな　紅緑

麥野　村雨に牛游がする麥野哉　枳風

七夕　牛に鞍くらきにゆかん男七夕　紀子

　　牽牛も夜目にはしろし男七夕　千之

星迎　雨の夜の名は水牛よ男七夕　行休

　　其牛に小車さきぬ星迎　也有

　　牛も漸物くひ止みて二ッ星　竹宇

　　潜上に牛ひく星の日くれかな　大江丸

　　もう〳〵と牛鳴く星の別れかな　子規

牛祭　凡そ天下に牛祭りなんほうけたる　鼠骨

踊　月踏んで三人行くよ牛祭　なみ江

　　踊り子の牛追ふて來る在所哉　交計

秋

立秋　秋立や牛の蹄を鳴らし行く　つた女

秋風　牛部屋に蚊の聲よわし秋の風　芭蕉

　　牛の子の旅へ行くなり秋の風　一茶

　　去年賣りし牛にあひけり秋の風　大江丸

露　朝露や我鼻ねぶる牛の舌　荆口

野分　とぼ〳〵と牛を屏風に野分哉　横凡

　　牛の尾の落ずるに戻る野分哉　蓼太

相撲　つたなさや牛といはれて相撲取　彫棠

秋の蚊　秋の蚊や鐵の牛も喰ふべし　蓼太

秋の螢　牛の尾にうたるゝ秋のほたる哉　成美

月　牛吼て山路か鼾月高し　柳興

野に寢たる牛の黑さを秋の月　嵐雪

明月に瞽女を乘せてや牛に琵琶　素之

名月や牛に汗して犀の角　大江丸

殘月や牛の乳房の片あかり　紅葉

秋の暮　ふらば降れ牛は牛づれ秋の暮　乙行

女郎花　草刈や牛より落てをみなへし　春澄

牛にのる嫁御落すなをみなへし　其角

牛捨る野に立るやをみなへし　成美

小車草　小車やさすがに牛の喰殘し　也有

鷄頭花　牛の鞍おろし捨けり鷄頭花　東起

花野　横乘に花野ゆるすや牛の鞭　萬里

雲に吼へて牛越ゆる麓花野哉　櫻魂哉

菊　牛吼て旭先づてる野菊哉　心水

牛寢るや勿體なくも菊の上　きよ女

蔦　年よりて牛に乘りけり蔦の路　木節

紅葉　牛ぞ牛紅葉ふみ分け中の橋　才丸

木の實　牛道のぬかりつはまる木の實哉　多代女

冬

凩　凩や脊中吹るゝ牛の聲　風斤

凩や藁まきちらし牛の角　塵生

凩やこぼれてひるの牛の聲　園女

時雨　鷄の聲に時雨るゝ牛屋哉　芭蕉

柴はぬれて牛はさながら時雨哉　其角
牛がきて白うなるほど時雨けり　許六
山下や牛にもはこぶしぐれ水　野坡
牛馬のくさもなくて時雨かな　浪化

寒さ

角つゝむ越後の牛の寒さ哉　紀之

枯野

牛の行道は枯野のはじめ哉　桃酔
牛飼の薪して來る枯野哉　一雨

冬枯

牛の尾の外はうごかぬ枯野哉　蓼太
冬枯の道をしるべや牛の尿　卜尺

雪

雪の薪牛追ふものに暮つらむ　文排
此雪にいの字の奇楠や牛香爐　三弄
我や賤牛に雪咲く黒木茶や　其角

牛の尾にくるふ雀や雪の上　逸名
初雪や連子にはいる牛の角　谷水
牛叱る聲に明たり窓の雪　夏嘯
雪空や片隅さびし牛の留守　丈草
初雪やふりかへり〳〵牛車　三貫
牛馬の糞ふみわけて雪間哉　貞好

千鳥

汐を引く牛のすくむや村千鳥　苔淺

大根引

大根引く人にとはゞや離れ牛　尙政
川千鳥牛の喰ものなかりけり　成美

神送

此里の牛の聲きけ神送り　木枝

御佛事

御佛事や牛盗人も齊にくる　一方

鉢叩

殊勝也牛の糞ふむ鉢たゝき　鬼貫

頭巾　牛賣りのまぶかにきたる頭巾哉　乙總
榾　博勞が牛馬の論や榾の宿　江流
冬籠　百姓の牛肥しけり冬籠　鶯子
年内立春　春見ゆる年薪の牛の歩み哉　蓼太
年忘　牛の子の角や待らん年わすれ　荆口
年の市　牛の脊に霰はしるや年の市　也有
師走　牛馬には師走のありて寶哉　凡圭
歳暮　行幸の牛洗ひけり年の暮　其角

第四章　禪と十牛

蜀道の嶮とか浮世の波とか世路の難は昔から謠はれてゐる。殊更舊道德の權威が廢れて、則るべき何物をも得られない近代の人の、日毎に襲ひ來る生存競爭に追ひ捲くられる樣は眞に渦卷のやうだ。功名富貴榮達は萬人の趨望する樂園（ユートピヤ）かも知れない、けれども得るに途を以てせざれば豫期せぬ碍害に逢着するを免れぬ。現實の苦悶に堪え切らない者は遠慮なく墮落する。墮落には又墮落の理屈がある。かくして世は混沌として魁魁魎魎の徒の喚叫に充てる樣は今も昔も渝らない。

此間にあつて脇目も觸らず、守るべきを守り行くべきに行つて千里を遠しとせざる牛の悠揚は、左ながら群少を睥睨する王者の

慨がある。佛家のある者が、十牛の圖を錄して人間修養の徑路を諷したのは頗る味ふべきことである。

十牛の圖は禪家修錬の戒として古來研覈反覆せられたるもの、各人各種其見るところを異にするのは蓋し內觀自在逼通の佛理の然らしむる所であらう。編者自ら揣らず、古今碩學太德の後へを追ふて十牛圖解を試むるもの、たゞ本書のために捨つべからざるを思ふが故である。

一　尋牛

從來不失何用追尋　由背覺以成疎
在向塵而遂失、　家山漸遠岐路俄差
失熾然是非鋒起、　從來不失何用追尋

たづね行みやまの牛は見へずして
たゝ空蟬の聲のみぞする。

牛を尋ねるは心を尋ぬるの譬喩で、心を尋ねるは道を覓むるの謂である。龍牙和尙の偈に曰く「牛を尋ぬる須く跡を訪ぬべく、道を學ぶ宜しく無心を訪ぬべし」と、寄せ來る浮世の仇し浪は、用意のない我身を襲ひ來つて、引くに引かれず進むに進まれず、艫擢を失つた小舟の大洋に漂ふやうに、身は颯々として波に弄ばされ心は悶々として不安に惱む。途なきに苦しむ砂漠の旅人のシーズンの影を憧るゝが如く、惱める犢の牝母を慕ふが如く、わが安住の棲家を尋ねんとして心の主の詮索に取りかゝる。それを牧夫　牛の志を起して瀟條たる夏山に鳴く蟬の聲を聞きつゝ、奥山深く岐け入る姿に譬へたのである。

覓めずんば與へられず、尋ねずんば遇ふべからず、何物かを贏ち得んとする勇猛心は、己れとわが身を躍らして旅姿凛々しく、荊棘からみ葛蔓縫ふ山路を恐れず一歩一歩を踏み入れた。

晝尚暗ほき深山路は、岩石凸屹として落葉地を掩ひ暗澹として人の子一人通らない。路傍の岩に腰を下して行く手を眺むれば茫々無邊、雲か霞かわれを導くものとてはない。

人我の山の巍々として高く、愛河の水は湛々として深く、路愈々遠くして望み愈々轉々、終日終宵孜々として勤むるも徒らに疲勞と困憊の來るのみ、茫々焉として進退これ谷まる。「山彦のこたへありとはきゝながら跡なき空をたづねわびぬる」とは將しく此時の狀態である。これを歌つた頌としては

尋牛　一山禪師

本無形跡可求尋　雲樹蒼々烟艸深
脚下雖然岐路別　富門枯木自龍吟　雪村禪師

同

那邊尋了這邊尋　步入荒村野徑深
毛色不知何所似　夕陽芳艸謾沈吟　龍湫禪師

同

分明聞有一頭牛　若不逢渠誓不休
紛北谿南無覓處　夕陽西去水東流

其二　見跡

依經解義閱教知蹤　明衆器爲一金
體萬物爲自己　正邪不辨眞僞奚、

未入斯門摧爲見跡

心さしふかき深山のかひありて
しほりのあとを見るぞうれしき

一念勃起、世路の險を侵して深山の奥へ尋牛を試みた牧夫は、漸くにして覓むるものの足迹を攀り得た。去りながら之れ電光石火一燦の閃きのみ、忽ちにして消へ、忽ちにして亦生ずるのだ。三界に沈淪し死生に彷徨し、幻を追ひ風を捉へて、或は躓き或は轉び、漸くにして得たものは、汝が行く手の途しるしのみ。

榮西禪師曰く「天の高さ極むべからず尙天の上に出づ。地の厚き測るべからず尙地の下に出す、日月の光りは踰ゆべからず尙日月の表に出す、天地是れを待つて覆載し日月是れを待つて運行し四時萬物是れを待つて變化發生す」と、知らず汝が辛ふじて攀り得たる一道の行く手は、更に行く手の瀨踏みならざるなきか。

安心立命の境を憧憬し、確たる信條を掴まんとして、哲理を味ひ文學を慕ひ、敎會を訪ね禪房に入るも得たりと思ふは殺那の夢幻、のみ其境一度去れば朧朦たる元の木阿彌で、妄想の雲は漠々として拓けず、煩惱の霧は更に一層の濃さを增す。「志ふかき深山のかひありて、しほりのあとの見るぞ嬉しき」と思つたのも束の間、「おろかなる心は猶も迷ひけり、敎へのみちのあとはあれども」で天空海濶、豁然大悟の域には容易に達せられない、絕望と自棄は多く此時に起り、頽廢と墮落は多く此所より來る。

見跡　一山禪師

艸窠裏走路何多　只此蹄涔莫見麽
脚力窮邊重進步　昂々頭角要逢他

同

無奈岐中岐更多　東西還覺錯行麼
雪消泥滑前岡上　莫認蹄蹤失却他

同

自信古人牛作宗　忽然認得四蹄蹤
不知芳艸春風外　正在郊雲弟幾重

其三　見牛

從聲得入見處逢源　六根門着々無差
動用中頭々顯露、　水中鹽味色裡膠費
貶上眉毛非是他物
青柳のいとの中なるはるの日に

尋つね逢ざるかたちをぞ見る。

尋牛を志した牧夫は西に奔り東に驅け辛ふして見跡の曙光に接した。行く手の灯を得た彼は挫する弱さを一縷の望に支へて仆れんとする足も求むるもの足跡に活き、喘きつゝも捲まざりし彼は其姿を認むる所までの地點に達した。いよ〳〵茲に覓むるものの其正體を確め得たのだ。これ卽ち自己の心の本體を初め怡得したところ、一度心を怡得すれば轄然大悟、迷夢一時に醒めて、百花爛漫の樂園其所に拓け悠久不滅の天國其所に來るの概があらう、其未だ心牛を見ざるや、徒に迷ひ徒に悶へ、波なきに波を起して自ら其渦中に投し、岩なきに岩を作つて自ら岩に躓き、心を勞し身を勞し、恰かも盲人の大道を蹈み迷ふが如きであつたが、一且其機到り其想熟し、其境に達せば、颯爽たる意氣、雄大の氣魄、更に汝の

努力を鼓舞するものがある。

されど複雜極る人事の紛糾は、決してさう單純に片付け得べきものではない、足迹を尋ねて漸くに色讀し得た見牛は、今は未だ其頭ばかり其尾ばかり、修養の行く手に促ふべきその物をこそ見たれ、未だ其全體を獲得したのではない。「濁り江も影みる計りすみかへて、水こそ月のこゝろなりけり」だ、更に一歩を進めて月の心を捉へなければならぬ。

見牛　一山禪師

風暖幽禽枝上聲　雨餘原艸色尤青
者回已覩渠頭面　戴氏毫端寫弗成

同　雪村禪師

髪髴鳥犍喚犢聲　隔溪隱映柳烟青
細觀頭角全呈露　尚有人嫌未十成

同　龍湫禪師

無邊韻景滿林坰　柳絲花紅又艸青
蹄角鼻巴藏不得　戴崧於此畫難肆

其四　得牛

久埋郊外今日逢渠　由境勝以難追
戀芳叢而不已　頑心尚勇、野性猶存
欲得純和必加撻　はなさじと思へばいとと心うし
これぞ誠のきつなならけり

あゝ今は我手に捕へた。知つたばかりでさへ嬉しかつた。見

ただけて勇んだ。而かも今は我手にあるのである。牧夫の悅びやいかに。

書を讀んで感激した人は談を聽ひて心醉した。而して今は自らが其境に達したのである。一擧手一投足最早おのれの思ふが儘だ。

「風吹けども動せず天邊の月、雪壓すれども摧け難し磵底の松」とは欣ずべき清操を謠つた句であるが、大丈夫の將に心牛を體得して靈地妙境に達すれば、泰然不動拔くべからざるものがあるべきだか、得るも其人を得ざれば守るに其途を以てせぬ。一度得たる得牛の妙境も、新たなる問題の起り豫期せる事件の襲ひ來らば、それに應ずべきの修錬は未だ足らぬ。得たる心牛も牽ゆるの途を失はゞ、狼狽と困憊は依然として其身を圍繞するを憚らぬ。雨に風に、意は動き氣は移る。折角獲たる心牛も用ひざるに失ふの悲境に陷るを保し難い。

長沙の「學道之人不識眞、唯爲從前認識神、無量却來生死本、癡人喚爲本來」と唱破したのは此所の場合、更に心牛をして風吹けども動せず雪壓すれども摧けざるの根底に置かねばならぬ。努力せよ努力せよ、努力の前途は未だ遼遠だ。「をり得ても心ゆるすな山櫻、さそふあらしの有りもこそすれ」だ。

獲得の頓悟に安んせず、緊禪一番更に大なる修錬を加へねばならぬ。

得牛

一山禪師

鼻孔遼天拽轉渠　從今狂逸性須除
雪山香艸和烟細　且要驅來向此居

同　　雪村禪師

遼天鼻孔忽穿渠　　倐性如何便得除
莫戀他人苗稼好　　且歸林下共安居

同　　龍湫禪師

竭盡求心神亦盡　　豈知今日自相牽
若能未得純和去　　牢把繩兮痛著鞭

其五　牧牛

前思纔起　御念相隨、由覺故以成眞
在迷故而爲妄　不由境有唯自心生、鼻索牢牽不容擬議
日かぞへて野かひの牛も手なるれば
身にそふ影となるぞ嬉しき

覓むる牛は千難萬苦を侵して我手に入れた。手に入れたとて油斷はならぬ。牧して以て叱すれば蹙み驅ければ行き、右すれば右し左すれば左するの妙境に到らねばならぬ。野火は燒けども盡きず、流水は流るれど歇まぬ、移り易きは人心、瞬時も油斷してはならぬ。

得牛は牧せざれば其用をなさず、玉は磨かざれば光がない。白隱禪師が「悟後の修行が何より大事ぞ」と云つたのは此場合に當て嵌る。行ふ處其節に當るのは牧牛の功を積んでからの事だ。獲得し來つた野牛を牧し得ず、認めた曙光に再び暗愁を帶ばしむるならば、寧ろ初めより苦まざるに若かずだ。これからの修養こそ殺活自在の妙機を獲得する眞修養だ。

一旦の悟道は難きに似て實は易いが、悟後不斷の修養こそ、易き

に似て頗る難い。此場合吾は決して小成に安んじてはならない、失敗は多く得意の時に其因をなすものである。努力又努力、奮鬪又奮鬪、發念の初期に優る幾十倍の覺悟の臍を固めねばならぬ。千載一遇の心牛をして再び元の迷雲邪霧に掩はしむるが如きことあらば、一毛の油斷千里の禍、九仞の功を一簣に缺ぐものである。

鐵舟禪師

牧牛

耕盡田園獨自行　綠楊陰裡角崢嶸
待他忽地生兒去　手把金鞭賀太平

「刮龜毛於鐵牛背上、截兎角於石女腰邊、嚇殺嘉州大象」

「驚走陝府鐵牛」

其六　騎牛歸家

「干才旣罷得失還空、唱稚子之村歌、吹兒童之野曲、身樵牛上目視雲霄、呼喚、不回撈籠不住」

すみのぼるむくろの空にうそぶきて
たちかへり行峯の白雪

牧夫鞭索の効空しからず、獲得した野牛は次第に純和の城に達し、悠然として渠に騎し靄々たる暮雲を眺めて、家路に就ける彼の牧夫の得意如何ばかりぞ。牛は命ざれども進み、鞭せざれども行く、而も其道を違ふことなく、其行を過る事がない、牛と彼とは今一體となつた、鞍上人なく鞍下馬なき快馬奔驅のそれにも比すべき高境に達したのである。

曾つて亂走暴行度し難かりし心牛は、今の修養の諒和を得て、自己卽心牛、心牛卽自己の理想境に達したからには徒らに名聞を追

ひ色慾に溺れ、毀譽褒貶に喜憂する片々子ではなくなつた。胸中常に光風霽月を宿し洒然として閑日月がある。されば威武も屈する能はず富貴も姪する能はず。自意の向ふ處自心の冀ふ處、月に臥し花に眠り悠遊自適行くところとして可ならざるはなしである。

併ながら此牛元々尋常の牛でない以上、歸るとは何處に歸るのであるか、家とは何の家を指すのであるか、人間本來空、宇宙に雙目なく乾坤は只一人なのだ。「ふる郷と定むる方のなき身には、いづこに行くも家路なり」

聊か爰に心牛を捕獲した吾々は何處に歸り何處に繫ぐべきか究めねばならぬ。

騎牛歸家　一山禪師

贏牛己純卻同家　樹下柴門啓暮霞
放敎駒欄裏臥　靜看新月掛蒼牙　雪村禪師

同

紫陌紅塵不是家　數聲控角入烟霞
高山會友鐘期耳　誰道人聞少伯牙　龍湫禪師

同

飽臥平原睡正酣　自催歸興出烟嵐
橫身背上將羌笛　一由還鄉吹再三

其七　忘牛存人

法無二法　牛且爲宗　喻蹄兎主異名　顯筌魚之差別
如金如鑛　似月離雲　一過寒光威音劫外

よしあしとわたる人こそはかなけれ

ひとつ難波のあしとしらずや

さて尋牛、見跡、見牛、得牛、牧牛、騎牛と、功成り名遂げた凱施將軍の概を以て、家路に着ひた人と牛、還つて見ると不思議や今迄騎した牛は忽焉として其姿を失した。茫然自失暫くあつて、越し方を眺むれば、萬籟寂として濛雲靄々、獨り明月の皎々として中天に懸るあるのみだ。拱手して瞑想一番せざるを得なくなつた。

此處まで來ると幽現一致の哲理を仄し始める。最早野牛もなく心牛もなく、自分其ものが存在さへ疑はれて來る。啻に自分のみでない、自分を圍繞する周圍の總てが疑しくなるのだ。

舟に楫して中流を行くは彼岸に上陸するが目的で、梯(はしご)は低きより高きに上る方便に過ぎぬ。既に彼岸に着し、既に高階に上り終

らば焉ぞ舟を要せん、梯を要せんで、凡そ修錬の要は、進むに從つて方便を棄てなければならぬ。到るべきに到つて、尚其方便と目的の辨別を誤り無用の執着を脱し得ないのは、徒らに自繩自縛を招くのみであらう。恰かも舟を負ふて陸地を歩み、梯を擔ふて水中に入るの愚に陷るに等しい。

幸に夙に大勇猛心を起して、一念蹶起、幾回が折られ幾度か妨げられ、而も屈せず刻苦精勵、漸くにして得たる玲瓏不昧の清光、清風明月を拂ひ、明月清風を拂ふの至境にまで達した。「夢の中に難波のことを見つれども、さむればあしの一夜なりけり、」

方便に執着して目的を誤りてはならぬ。

忘牛存人　　雪村禪師

荒田畔盡屋頭山、放去從教遂處間

飽飯席蓑還枕笠　這回無夢到人間

同　一山禪師

蓑笠從玄不入山　鞭繩拋卻一身間
更無殼觳勞牽拽　贏得謳歌翠靄間

同　龍湫禪師

失是

其八　人牛俱忘

凡情脫盡聖意皆空、有佛處不用遨遊　無佛處須走過
兩頭不着　千眼難窺　百鳥啣花一揚懿懼
雲もなく月もかつらも木もかれて
はらひ果てたるうはの空かな

法に二法なく牛を忘れて月を仰ぎ、我の存在を疑ひ萬象の歸趣に思ひ出らば、忽焉として又我もない、凡夫の情も聖人の意も元これ空だ。佛もなければ心牛もない、妄想を去れば煩惱も失せた。されば佛界にも登らず魔界にも墜ちず刹那も愛せねば未來も恐れぬ。心に有無の恩惟もなければ、生死の嶺もない。百鳥は來つて花を捧げ、群鹿は來つて頭を垂れて其言を聽く禪の秘機は茲にあると云ふのだ。味噌の味噌臭きは上味噌に非ざるが如く、學者の學者臭きは眞の學者でなく、禪者の禪者臭きは野狐禪に過ぎない、眞の兵法家は六韜を論ぜず三略を語らず凡愚と擇ぶところ無しと雖も、一朝事あるに及んでは神駒千里、閃電猶ほ遲しの快擧を演ずる。有佛も可、無佛も可、今は人牛俱に奪ひ双絶全空、迹を拂ひ影を滅した。たゞ有るものは虛空のみだ。虛空これ何物、說くべ

からず描くべからすと雖も百物其中に充つ、充つるものを掴むと掴まざるとは其人の修養如何によりて岐れるのだ。

ある禪僧が白及を上段にかざして問ふて「如何か是れ趙州の露及劍」と云つたら、一人は軍扇を揚げて、紅爐上一點の雪、と答へたとやら。山に登るも、高さを究めざれば其山を語る能はず、海に入るも深さを究めざれば其海を談ず勿れだ。修養の要は唯だ徹底を求むるにある。

人牛俱忘　一山禪師

一念空時萬境空　重々關隔豁然通
東西南北了無跡　只此虛玄合正宗

同　雪村禪師

十虛銷殞劫空々　月白風清戶牖道
欄圈蕭々人寂々　海門不放水朝宗

同　龍湫禪師

本來無世界及衆生　豈有人牛更可名
消息盡時消息子　神光發起自圓明

其九　返本還原

本來清淨不受一塵　觀有相之榮枯　處無爲之凝寂
不同幻花　豈假修治　水綠山青　坐觀成敗
法の道あとなきものの山なれば
松はみどりに花はしら露

牛もなく人もなく恍惚として夢幻の境に入つた。過去もなく未來もなく萬象一詩に消滅した感がある。明境の皎々として何

物にも蔽はれざるが如く、本來は清淨にして曾つて一塵の交りがない。取るも可捨るも可、取つたからとて減りもせず捨てたからとて增しもせぬのが人間の本源である。けれども悠ひに本を忘れ源を失し、書を逐ひ流れを尋ねて、迷雲は心月を掩ひ右顧左胯多年風塵の客となつてゐたが。

しかし幸に本來清淨の本源に還つて徐ろに達觀すると實際一塵一法の立つべきものはない、色もなく波もなく迷もなければ悟りもない、而かも變に處し機に應じて其肯綮を誤たぬのは靈眼常に明かなるが故である。

推移は宇宙の形であり變化は萬有の常である。殊に人事の存亡興廢に至つては旦夕を問ふの暇さへない。其無情變遷眞に幻影に異らずだ。此間に處して隱見出沒常住不變の道理を掴み得るもの、これを達人といふべきだ。

東坡の「溪聲廣長舌、山色清淨身」と云ひ「古松談般若、幽鳥弄眞如」と云つたのは這般の消息を洩したもの、眞理は坦々として大道の如しだ、けれど智あるものは智に迷ひ、能あるものは能に累せられ、近きを棄てゝ却つて遠きを求め、易きを顧みずして却つて難きに就くの誤りを生ずる。須く一朝三春の夢より醒め、本に還り源に返つて其實體を究めねばならぬ。

返本還源　一山禪師

既然無作有何功　眼見如盲聽似聾
澗水湛如藍色碧　山花開似錦機紅

同　雪村禪師

轉金成鐵到無功　見色聽聲不用聾

但得嶺南春信早　梅花白勝爾桃紅

同

返本還源癡懿、　大人境界與誰談
山花簇々開如錦　澗水澄々湛似藍

龍湫禪師

其十　入廛垂手

柴門獨掩、　千聖不知埋自己之風光　負前賢之途轍、
提瓢入市　策杖還家　酒肆魚行、　化令成佛
手はたれて足はそらなるをとこ山
かれたる枝に鳥やすむらん

忘牛は忘我となり忘我は大虛となつた。虛か實か、虛々實々苟くも肯綮を誤たざれば最早悟道達人の哲士である。尋牛の一より次第に順を追ひ度を重ねて粒々辛苦、一艱更に一艱を越へ、修養に修養を積み、一糸亂れず進んだのは、これ入廛垂手のためであつた。入廛垂手は修養の極致、向上の究極である。牛圖解一篇は牛を以て心を映すに用ひた。心を映す必すしも牛のみでない、萬象は一に歸し一は萬象に歸す、兵家は兵に、商賈は商に、農家は農に、學者は學に、各自らの途に於て到達すべき徑路は異るを免れない。達磨は面壁に、維摩は一默に、徹山は棒に、趙州は喫茶に倚つた。各自特有の門戸を拓ひて自ら進むべしだ。要は志を達するにある。鐘の音は敲の强弱によりて分れ、人の事業は努力の大小によつて別れる。たゞ色界に入つて色惑に流れず聲界に入つて聲惑を被らざるの修行が肝要なのだ。小隱は山に隱れ大隱は市に隱ると云ふ。言ふに言れず說くに說れぬ這間の消息は、達者のみ能くこ

れを知り得るのであらうけれど、淵に臨んで魚を羨まんよりは退つて網を結ぶに如かずだから、不斷の努力こそ大切である。努めて怠らざれば、龍のあきとの玉も取るべく、枯木に花も咲かせ得べしだ。孔子は、我七十にして心の欲する處に隨つて矩を越へずと云つた。心の欲することにして矩を越へなかつたら、吾々は奈何に安全に、如何に喜悅に滿つるであらう、げに十牛の徑路は宗教道德の極意、世態人情の眞隨である。

入廛垂手　　一山禪師

換二郤皮毛一轉レ步來　依二稀鳥鵲與魚腮一
通身固是混二泥水一　我此宗門要大開

同　　雪村禪師

鬧市叢中接二往來一　喚回レ頭處掌欄腮一

相隨有二箇牽一犁把一　袋口依レ何不二解開一

同　　龍湫禪師

柴門深閉義經年　策レ杖提レ瓢入二市鄽一
伴得通身混二泥水一　誰知脚下有二書天一

十牛の解はこれを總てに當てゝ解するに妙だ。試に學生修學の徑路に譬たならば、第一の尋牛は、修學の志を起して目的學校の規則書などと首引きで考へ込んで居時であり、第二の見跡は、あらゆる周圍の妨碍と戰つて、父兄の許可を得るまでに漕付けたところ、第三の見牛は、勉强の甲斐あつて、都合よく入學試驗に及第したところ、幸に幾年辛酸を嘗めて卒業證書を得た得意さ加減が得牛の時代であらう、第五の牧牛となると、修め得た專門の智識を基本に、旨く實際社會に應用しやうとする苦心で、騎牛となると、一廉の

社會的地位を獲たに比しやう、さて此所まで來ると人間としての普通の努力はしたやうなものの、飜つて今迄一意專心努力し奮鬪し來つた方面以外を眺めると、中々以て安心すべきでない、忘牛存人、人牛倶忘と段々に處世立身の方便から脱却して、人類としての成すべき又なさんとする域に達する。更に返本還源、入廛垂手と入つて殺活自在、福德圓滿の達人となる。と解したらどうか、餘りに實際的功利的解釋であつて、深邃幽妙なる禪の立場から見れば、嗤ふべき迷者の言に過ぎなからうけれど、斯う云ふ風に解したとて敢て差支はなからうと思ふ。

第五章　故事俚諺

黑牡丹

事類全書に、唐の劉訓と云ふ者あり京師の富人なり梁氏の國を開くや、嘗つて假貸して以て軍に給す。京師の春遊牡丹を觀るを以て勝賞と爲す、訓客を邀へて花を賞す、乃ち水牛數百を繫ぎて前に在り指して曰く此れ劉氏の黑牡丹なりと云ふに始まる。牛の別名也。

對牛彈琴

魯の賢士公明儀牛に對して琴を彈じ清角の操を弄す、牛食ふこと故の如し、牛の聞かざるに非ず、耳に合はざるなり云云と、祖庭事

苑にあるに始まる。大聲俚耳に入らずの謂にて、愚人に理を說くの愚を意味す。「明心寶鑑」に、四皓謂『子房』曰、向『獸彈』琴、徒盡『其聲』。「野客叢書」に、對牛彈琴の語あり、「定賴集」に、琴の音はかさずもあらん彥星の、牛の前には誰がひくべき「さゞめごと」に、天數寄愚鈍の人は千度百度きゝても、牛の前にしらぶる琴とやるらんなるべし、などあり。

李牛黨爭

唐朝の世、李德裕と牛僧孺との二人、互に私黨を立て、排擠を事とし政權を弄すること四年、文宗帝歎じて曰く「河北の賊を去るは易く朝廷朋黨を去るは難し」と、同黨異伐の弊を指せるもの。

牛驥同早

牛驥は牛馬の謂也、早は槽、賢人過つて凡人の待遇を受くるを痛むの謂、鄭陽が獄中より梁王に書して、「不羈の士をして牛驥と早を同うせしむ」云々とあるより起る。

放牛桃林野

周の武王牛を桃林の野に放つて復用ひざるに起る。王者の惡氣を示すもの也。

木牛流馬

孔明の用ひたる戰略也。三養雜記には「孔明が木牛流馬を實に

木にて造れる牛馬の歩みたりと思ふは避事なり」と記し、「兵衛」と云ふ、明書には「孔明が木牛は獨輪車の別名」とあり、されば流石の孔明とて、天馬空を射る底の晴れ業を演じたる譯にあらず、獨輪の木車を造りて間道を運送せしものか。四脚ありしが故に木牛とは名付しならん。

汗牛充棟

柳文の陸文通墓表に其爲書、處則充棟宇、出則汗牛馬」とあるに出づ藏書の多數なるを云ふ也。

牛耳を執る

左傳に「諸侯の盟には牛の耳を割きて血を取り之を啜る卑者牛

耳を執り尊者牛耳に蒞み盟者を次するを司る。故に牛刀を執るは卑者のことなり、然れども哀公十七年の杜臣に牛耳を執り盟を司る者とあり、故に盟世の義とすとあり。

割鷄牛刀

論語陽貨篇に「子之武城、聞弦歌之聲、夫子莞爾而笑曰、割鷄焉用牛刀、とあり、「文苑彙傳に、以函牛之鼎、爺鷄、とある。小事を處するに大器を煩すの愚を諷せる也。

牛後

史記の蘇秦傳にあり「鷄には小と雖も食を進む、牛後

「刀を賣りて牛を買ふ」

武士の歸農するを言つた語にて、「金壁故事」世傳に、一武人詩日、欲「掛」衣冠神武門、先尋水北渭南村、却尉舊斬「樓蘭」、賈「得黃牛」教「子孫」とあるに出づ。

「寢た牛に芥かくる」

自分の爲した惡事を人に嫁せんとするを云ふ。「世話盡」に、寢た牛に芥かくる云云の語あり。

「女さかしくして牛賣りそこなふ」

俗に猿智慧と云ふ女の淺智慧事を誤るを諷せる也。近松の「出世景清」に「アノ景清はナ、大宮司の娘あの姫を最愛し、御身が事は當座の花、後悔するとも叶ふまじ、女さかしくして牛賣られぬとは御分が事ぞ」と云へり。

「早牛も淀、遲牛も淀」

早舟も淀、遲舟も淀と云ふに等し。「嵯峨天皇甘露雨」に「よし此度は助くるとも遲牛も淀、早牛もめぐる報の牛車、恨の劍一太刀」と云ひ狂言「牛馬」には「ヤイ〳〵其樣に急いたりとも汝が勝にはなるまいぞ、夫はなせに、ハテ早牛も淀、遲牛も淀」といふに依つて泊の晩までには追付かうぞ」などあるを見て知るべし。

「三把つけて臥牛、八把つけて起牛」

年の豐凶を牛にかこつけて判斷する傳說也。正月三四に丑の日あれば其年は豐作なりとし、拇指、食指、中指と三屈して、五指中に

臥せる指多ければ之れを臥牛（ねうし）と唱へて豊兆とし若し正月八日に丑の日あれば、元日より數へて五指の中、伸ぶる指三つにて多ければ之れを起牛と唱へて凶兆とす。

「老牛犢を舐る」

おのが愛兒を掬する切々の情を言ふ「後漢書」楊彪傳に、彪曰、悔無日禪先見之明、猶懷老牛舐犢之愛とあるに出づ。

「牛を馬に乘りかへる」

牛の鈍きを棄てゝ馬の迅きに就く。勝れるに就く喩也。「鷹筑波」に「牛を馬にぞ乘りかへにける、武家にて知行給はる御百姓云云」「伊賀越道中双六」には「ヤアコリヤ金子五十兩、テモ結構なおしるしやな、隣の病人なほしたとてたかだか二朱か、ようくれて百疋は覺束ない、ほんのこれが牛を馬にのりかへたと申すもの」とある。

「牛を食ふ氣」

幼にして膽氣あるを云ふ。蛇は寸にして人を呑むの類「戸子」に虎豹之子雖未成文、已有食牛之氣、杜甫、小兒五歳毒呑牛、滿堂貴客皆回頭とある。

「牛は願から鼻を通す」

自ら死地に陷るを嘲るに用ゆ「江戸生浮樺燒」に「牛は願から鼻を通すと、艶治郎がわる案じの心中、此時浮名がばッと立ち澁團扇の繪まで書ひてだされけり」とある。

「牛は死んでも前田は荒さぬ」

その仕ふるに忠なるを言ふ。「禮記」に、古之人有言曰、狐死止丘首仁也」とある。

「牛の角を蜂が螫す」

鹿の角を蜂が螫すともいふ。油斷のならぬ事を言ふ也。「本朝俚諺」に、會元云、道匡禪師曰蚊子上鐵牛無汝下觜處云云「禪家龜鑑」云、如蚊子上鐵牛下觜下得處棄命。とあり。

「牛は牛づれ馬は馬づれ」

類を以て集るのたぐひ、同黨異伐の語のよつて來たるところ。

「清水物語」に、水と水とは集り易く、火と火とは伴ひ易し、とあり、韓詩外傳には「君子潔其身而同者合焉、善其音而類者應焉、馬鳴而馬應之、牛鳴而牛應之、非知也其勢然也。とある。

「丑の刻參り」

戀には嫉妬が伴ふ。嫉妬の無い戀は戀に非ずとか、亂れ髪姿恨みに曝し、角に擬ひし二本の蠟燭、異樣の吩裝に人目を避けての丑時參り、戀のローマンスと見れば此上ない興趣がある。

「牛の一散」

一氣阿成前後の思慮もなく逆上するを戒むる言葉也。「腐筑波」に「寅よりさきにかけ出にけり、よる夜中たが乘る牛の一散ぞ」と

あり「駿臺雜話」に「世話に牛の一散といふやうに、やゝもすれば機嫌にまかせ、調子に乘じなどして一概に物を決斷して快しとす、是は眞斷にあらず」とあり。

「牛に乘つたのでドーとも云へぬ」

皮肉に快味を言ふ時に用ゆ、馬に乘ればドウ〳〵と掛聲をすれど、牛に乘る故にドウとも云へぬ。何とも言ひ得ぬといふ寓意也。

「牛を牽く」

物を敏速にせぬこと、牛を遲物鈍物と見て、はき〳〵せざる物の譬へにりへ云。

「牛ほどな蚤」

春の日永の退屈まぐれ、日溫ぽくりに蚤退治と洒落れたところ、平常の無性が因をなして蚤の大きいのに驚いた。比較外れたことを言ふのである。

「牛追に時雨」

紅葉に鹿、水に月、牡丹に唐獅子の類、配合の妙なるを言ふ。

「牛尿に火のついたやう」

ぐず〳〵と埒のあかぬ事を云ふ。

「黃牛に衝れる」

黃牛は溫順のものとせられてゐる。黃牛に衝かれる程ののろまと云ふ意也。

「牝牛に腹つかれる」

前同様にて意外の失敗の意。

「牛も千里馬も千里」

宮城地方の談、巧拙遲速はあれど畢竟は同一目的に歸着するに喩ふ。

「牛の籠ぬけをするやう」

不手際なことをいふ。

「牛盜人のやう」

默々としてハキハキせぬ事を云ふ。

「牛にも馬にも踏まれぬやうに成る」

小兒の成長する樣を譬へて云ふ。

「丑どんの晝寢」

年寄の冷水と一對のこと。

「牛根性」

沈默して强情なるを云ふ。

「牛に經文」

猫に小判、馬の耳に風の類「小野道風靑柳硯」に「汝等にいひきかすは牛の經文、歸れ〳〵と行き過る」とあり。

蒔繪の重箱に牛の屎

外觀徒らに美にして內容之に伴はざるを云ふ。

「丑べつたり」

丑の日には相場安しとの傳說ありて、投機師社會に專ら用ひらる。

「牛の角のつきあひ」

中互のした人の事々に衝突するを云ふ。

「牛の爪で前からわかる」

未前に事を知るに譬ふ。

「牛の鞦（シリカイ）」

外（はつ）れさうではづれざるに喩ふ。

牛の尻

物識と云ふ意。

「牛の步み」

遲き喩。

「俗說」

「牛吼ゆれば天氣曇り風吹く」

「牛深三度行きや三度裸」

「牛は角を見て買ひ人は言を聞きて用ふ」

「牛の夢見るは天神樣への無信心」

「丑の日の事は長引く」

「丑の日に灰を取ると火事になる」

「丑の年に生れた庶子は總領に崇る」

「丑の正月物言はぬ」

「牛の子に味噌」

「牛の糞を知らずに踏むと錢を拾ふ」

「牛の皮を積み出すと暴風が起る」

「牛に追はれたら竹藪に入れ」

「丑年の子は兄に崇る」

「丑申高に己豊年」

「女が牛の綱を跨げば罰が中る」

第六章　牛に因める雜話

田單の火牛

昔支那戰國の世群雄四方に割據して攻城野戰に日も足らなかつた頃、秦、楚、齊、趙、魏、韓は各鼎立の有樣で孰れを覇者とも定め難ない、燕の國の樂毅將軍が齊を犯した時、齊は思ひ懸けない襲來に手廣い不覺を取つたことがある。齊は燕軍の爲めに攻め立てられて退却するばかり、纔に墨城と云ふ東方の孤城に凭つて漸く一縷の國運を繋ぐの有樣であつた。これを見た齊の將軍田單は憤激措く能はず、乃公出でずんばの意氣を起して落日の孤城に自ら入つて燕軍に當らうとした。勝誇つた燕軍此有樣を見て何

條默すべき、雲霞の如き大軍を繰り出して墨城を十重二十重に圍んだ。

田單は此時城中にあつて、千餘の牛を曳き出した。それ　五彩の龍文を描きた赤絹の衣を纏はせ、油を灌いた枯葦を其尾に結付けた。そして城の周圍に數十の大穴を鑿つて、夜半人靜まるの時を見計つて、用意した千餘の牛の尻尾の油を灌いた枯葦に火を點けた。牛は背水の陣どころではない。背火の焰で大荒れに狂ひ廻るところを、城壁の穴から追ひ出したのであつた。狂へる牛は阿修羅の如く燃ゆる焰を背にして圍める燕軍に飛び入つた。

斯うして敵の荒膽を碎いて、置いて機を逸せず勇敢の壯士五千人を繰り出して遮二無二燕軍に斬込ましたから、燕軍の驚愕は一方ではなかつた。狼狽へた夜目には牛の正體の分らう筈がない

朧ろに夜陰を破る龍文の怪物には呆氣に取られて爲す術もなかつた。隙に乘つた壯士の群は必死の奮闘で縱横無盡に斬り捲くる。城中では鉦太鼓に鬨の聲天地も破れんばかりである。不意を喰つた燕軍は田單の謀事にあはれ陣形を亂して見苦しい敗れに終るより外はなかつた。

一舉燕軍を塵殺した田單將軍は冲天の意氣を以て堂々の陣を張り一旦敵手に落ちた七十餘城を回復し、莒に蒙塵して居た襄王を迎へて齋國を天日の昔に返した。襄王は其功を稱して將軍を安平の君に奉じ、民其德に服し國勢殷振を極めたと云ふ。田單の火牛は東洋史上の華である。

木曾義仲の火牛

壽永二年の夏の事、木曾冠者義仲は源家の旗風に氣勢を添へるべく京師に押し上つた。平維盛單を率ひて越中礪波山に屯し義仲の軍を迎ふ。時に義仲田單の故智を學んで牛四五百を狩り集め角に松明を附け火を點じ、夜陰に乘じて三萬餘騎の先頭として敵陣に放つた。平軍の陣容ためにに大ひに亂れ人馬の峠より落つるもの幾百。維盛纔かに身を以て免るゝの止むなきに至つた。後世稱して木曾冠者倶利伽羅峠の合戰と云ふ。

平安朝の牛童

諸少納言の枕草紙には

「あさましきもの、牛惡みたる牛飼」又「牛飼童の例の牛よきしもざまにうち云ひて、いたう走り打つもあならたてと覺ゆ」などとある

平安朝の貴族が牛車に乘り歩ひた面影が偲ばれる。牛飼のことを牛飼童（うしかひわらべ）といふだに幽しい、牛飼童は垂髪に狩衣を着し鞭を持つて牛車の牛を使つたものだ。平家物語には「木曾義仲が牛こでいと云へりしこと見ゆ、こでいは健丁（こでい）なり、古畫を見るに大鬚（ひげ）なるもあれど頭は童なり、後世主水（もんど）などは立髪半髪なると同じ儀なり、八瀬の在所の男は駕輿丁（かきかき）に出るとかや、その古風にて惣髪にて齒を染むるもありとぞ、其髪も下さまの者は頭髪を童の如く束（たば）ねたるも多かるべし、されば京わらべと云ふ諺は此故にも因りたらんと云へり、さて牛車の馳るにも牛よくやるもの、車はしらせたるは、川舟の下りざまと共に快とすべきものなり」などある。以て洒落の風を察すべし。

空穗菊の宴には、

「侍從のあやしのつらへんじや」と云ふに答へて中將の「されど臥しぬる牛地するぞや」

國讓に

「牛の肩に文ゆひつけて送りたるなど面白からずとせんや」

大和物語には

南院の今君、巨城の牛を借りて、後再び借らんとせしに其牛既に死したりと云ひければ

わがのりしことをうしとやきえにけむ
草葉にかゝる露のいのちは

拾遺集には

世の中に牛の車のなかりせば

牛頭天王の誓證文

牛頭天王の祭神の素盞嗚尊であることは曩に說ひたが、俗に天王樣と云ひ天王祭りと云ふのは皆な牛頭天王樣のことである。古くより高野山、東大寺、法隆寺或は熊野社、那智權現、八幡宮など國々の名ある神社巨刹に於ては厄拂ひ疫除けの特殊の祈禱札を頒つて、これを牛王、又は牛王寶印を唱へて余程信仰を蒐めたが、何時しか起證文に牛王を引合に出すやうになつた。

熊野の神の牛王に誓證を立てるとは、紙治の淨瑠璃の文句にある。とぼ〳〵と魂拔けて逢瀨を樂む治兵衞が、血を吐く思ひで浮世の義理の柵に詮方なくて其誓紙を裂くところ中々に哀れ深し。

近松の心中物語の中にも「小春治兵衞」は其最傑作と稱せらるゝもの情韻渺茫々として千古に遺る。粹な町人氣質を發揮した「孫右衞門の義氣。おさんの優しい情操、戀の淵瀨の覗川は、嚴たる權威の牛王の札によつて、戀の誇りを飾る幾倍であらう。

赤穗義士と牛肉

大石內藏介が主家退散の後、同志の輩粒々辛苦の際、堀部彌兵衞の許へ牛肉を贈つたことがある。それに添へた信書と云ふのが三島通良氏保管になつてゐる。其文言は

可然方より到來致候故進上いたし候老養には最上との事故宜敷御用被成候、尤黃牛と申しながら是は若牛之由故肉合は格別柔きよし承及候今夕安兵衞殿被參候やに被仰聞可被下候

二日

堀部彌兵衛殿　　大石内藏之介

殺生禁斷嚴ましき時、物堅き武士の間に此事ありしは不思議のやうなれど、當時とて内密には食膳に上りし事掩べくもあらざれば、殊の外の珍品として友誼を罩めし贈品なりしならん。さるにても武士の友情欣ずべからずや。

埃及の牛の木乃伊

埃及では人の葬式に牛が出て、牛の葬式に人が出る習慣がある。埃及人はナイル河を界へて其東方に部落を作つて生活してゐるので、其西方は多く墓地になつてゐる。東方の部落で人が死んだ時には、河では船を用ひ陸では橇を用ひて葬式をする。此橇を曳くのが牛の役目であつたが、迷信の深い所であるから、種々の偶像を作つて神に祀る習慣がある。或る種の牛にはオシリスと云ふ神の靈が、生きながら宿ると稱せられて非常に尊敬を受けて得たが、其牛が死ぬると村中の人が集つて互に醵金をして手厚ひ葬式をしたのみか、牛の木乃伊を造つて地中深く埋めたものだ。つまり身分の高い人を葬ると同樣な葬り方をしたのである。それが習慣となりて牛の死んだ時には、人類同等に扱つて人が葬式に出るのださうだ。今でも埃及に行けば、堅固な石棺に木乃伊が保存されてゐるさうだ。

櫻田の變と牛肉

佛教渡來の影響を受けて肉食の風習は漸次減少はしたものの、

徳川時代になると藥用の名目の下に稍や肉食が行れた。徳川將軍家及び御三家では毎年彦根の藩主から味噌漬として献上することになつてゐた。これは牛の鞍下を毛附の儘味噌漬にしたので當時余程珍重されたものであつた。

何しろ徳川全盛の時であるから此御三家に献上する肉の運搬される道中は大したもので「下にゐろ〳〵」と下知呼ばはり、全るで大名行列そつくりであつた。ところが此牛肉の御登城が櫻田の變と關係があるから面白い。と云ふのは年々歳々渝りなかつた牛肉登城の儀式を井伊直弼が大老となつた時突然廢止を布達したことがある。直弼公は坊主上りであるから其感化ででもあつたと思はれる。其事を聞かれた水戸烈公は大の不機嫌で、態と大老に向つてそれとなく味噌漬献上のことを御催促になつた。大老は不愛憎にも、無益の殺生は嫌ひでござると云つて相手にならなかつた。それが又平生から感情の行札のある水戸家の惡感を增して兩公の確執は愈々解ける暇もなく、遂には水戸の烈士の櫻田の變となり、落花紛々雪紛々の騒ぎとなつた。

一休和尚と牛

墨染の衣を一笠一杖に托した諸國遍歴の雲水の身、小手脚絆うち翳して眺むるものは何、今日は此方明日は彼方の岸に吹く萍の頼りなきにあらねど、瓢々として青雲を家とする雲水の身には、人里離れた靜寂の山里に平和に畔の牧草を食む牛の姿は、やがてこれ懐かしきものの一つでなければならぬ。

京都紫野の大徳一休和尚が、未だ若年の折禪學修行に諸國遍歴

の際のことであつた。山里を別たぬ一日の跋渉行脚に、ほと〳〵と疲れ果てた身軀を持ち飽んで、暮れ行く彼方の杜蔭を見るともなく見渡すと。誰が繋ぎ捨てたか一頭の牛は、靄を破つて此方に歩を向くるのであつた。俗界を超越した洒脱の一休は其牛を見るからに天の與へと微笑んで、ひらりと牛の背に其身を据へて、悠々然として行手に鞍を向けた。夕陽を飾る殘んの色は鳶色に綠の野を彩る。

牛の見當らぬのに驚いた飼主は、右往左往に在所を探して血眼になつた。一休が横身を据ゑて天を仰ひで居る姿を見たから溜らない、怒りを帶びた跫音は荒く、勢ひ込んで走り寄つて有無も云はせず、牛の背より引擦り下した、罪を責め誰何する見幕はたゞ事でない。紫野の一休だと彼は答へた。當時一休と云へば鳴り響ひた高德の大禪師故、此僻事のあるべきを信ずる由もない、されど物心ある彼飼主は、殊勝らしい禪坊主の無邪氣な瓢逸を追究する程の野暮で無つたと見へ、然らばと十二支讀込みの和歌一首を求めた。一休は莞爾として需に應じて即咏一首

「午未、申酉さりぬ亥子よ俺れも去ぬ(戌)丑とら(寅)ぬさへ、う(卯)きなたつみ(辰巳)を」とやつた。

一休の狂歌は既に定評のあるもの、一度怒つた飼主は其一休なることを知るに及んで、却つて之れを光榮として、長く長く一門に言ひ傳へたと聞く。

牛と民間治療

熱のある時に牛の角を削つて服すると効目があるとは昔から

言傳へて居る處であるが、亞剌比亞人は腫物や外傷に對して、牛の角の先に穴を穿け、根元の大きい方を患部に當てゝ、先の方の穴から一生懸命に吸ふて全癒させる習慣がある。

尙ほ牛の血液は疾くから製劑に使はれてゐて、人の貧血を補ふ賣藥の大部分は多く牛の血液から製したものだ。其他膽囊の牛膽は消化劑として熊の膽と相併んで賞用されて居る。

一體血液中には黴菌を殺す作用のある保護物質が含まれてゐるので、血液を集中すればする程其保護物の量が殖へる。其處で其殺菌力を利用して患部を治療するのであるとのことだ。

屠牛場の濫觴

日本に於ける屠牛場の抑々の初りは、慶應三年に中川嘉平氏が芝白金に開設したのが嚆矢である。中川は當時新開の横濱を目差して流れ込んだ野心黨の一人で、外人と接觸する機會の多いのに連れて將來肉食の有望なるを觀破して屠牛の着手を計劃したが、因習の强い其頃の事として屠殺用の土地など貸して呉れるものがない。漸く芝の白金臺町の堀越藤吉氏に相談を持掛けて堀越氏の肝煎りで其土地に屠殺場を拵へた。さて屠殺場は漸くのこと出來たが、肉を販賣する店舗がない、牛の肉を賣るのだと云へば誰れも家を貸して呉れない。漸く芝の露月町で慾張り婆さんを慾得で說き付けて、普通の六倍も家賃を出して肉屋を始めたのだと云ふ。

牛市の起源

天王寺牛町由緒書の記する處を眞なりとすれば、大阪東成郡天王寺村は日本最初の牛市場である。同書には「往古牛町と相唱へ來たり、牛賣買とも私の手を經されば賣買なり難きより天王寺村は諸國より牛牽き來り牛市相立候に付博勞共私組下に相付き牛賣買支配仕來り」云云とある、私といふのは天王寺孫右衛門のことて牛市の司で、此人の印形がなければ牛の賣買の出來なかつたことは諸國の古老の昔く識るところである。

屠牛場で御經

肉食が普及するに連れて屠殺法も次第に進歩して、電殺法とかグリーナーの銃殺法とか、可るべく苦悶を少くして惡感を起させないやうな方法が行はれ出して來たが、其以前福澤先生が光明寺三郎氏とともに芝の新錢座に屠牛場を設へた時分には大變なもので、青竹を四本立てゝ夫れに御幣を下げて注連を張つて掛矢で射止めたものだ。屠殺が濟むと坊さんが出て丁寧に御經を上げることになつてゐた。何のことはない、御祭禮と御葬式を一緒にしたやうな騷ぎであつた。それで漸うやう、殺生を忌む近隣の苦情を押へたのださうだ。

牛車の牛

馬車の發達は近世のことで昔は馬車といふものは無かつた。從つて貴顯高官の車を挽くものは皆な牛であつた。牛車の牛は各々美觀を競つたもので、毛色や旋毛など八釜かしく云はれたものだ。

實用の牛としては車力の牛がある。車力の牛は今でも旺んに行はれてゐる。車牛としては大津牛が有名で、天王寺牛などは荷車用として名がある。

江戸時代の牛車

「牛は行く事正しく殊に早し、形婉にして精氣撓まず、力量勝れたるに輒(くびき)をかけ、重(おもき)を乘せて遠きに運ぶ、人の用を助る事其功誠に少なからす、古は淀鳥羽にのみありて、都の外には牛車なかりしに、御入國の頃より許宥ありて、江府にも是を用ふる事となれり、今は駿河にあるのみにて、唯三ヶ所に限れり」云云と江戸名所圖繪にあるから、江戸時代には右の三ヶ所の外は牛車を使はなかつたと察せられる。

大奥の丑待ち

八代將軍吉宗公の御代、大奥では丑待なるものが行れた。六つ頃から九つ頃までの間にやるので、將來の自分の運命を豫言するのだ。先づ一室の光りを消して眞暗の中に四隅に一人宛後ろ向きに坐つて、各自皆鏡臺を取り出して暗ひ中を一心不亂に眺めてゐる。すると九つ頃、即ち丑の刻になると鏡に人影が現れてくる。其人影を自分と見て未來の吉凶禍福を知ると云ふのだ。今日から見れば迷信に等しいが、何しろ大奥女中部屋での流行り物なので忽ち全國の大小名の女中部屋に夫々催されたさうだ。

農家の牛日待

關西地方の農家では一年一回牛のために日待ちと稱して一日の安息日を樂む習慣がある。祝餅を搗いて其の祝福をするのだ。大抵舊暮十一二月の頃で農家年中行事の一つになつて居る。

牛追物

騎射の一種に牛追物と稱するのがある。馬場で射る時には夫々の式目があるけれども、之を野飼の牛を騎射したのに名付けたのだ。吾妻鏡沿承四年六月五日の條に牛追物を行ふとある。源頼朝が命じて馬場を設けしめた以來騎射の一技となつた。東鑑の文治三年十月二日の條に「二品會出由比浦給有牛追物重朝、義盛、義連、清重爲射手」とある。

牛裂（うしさき）

室町時代の末、戰國の頃專ら行はれた一種の刑罰で、牛に罪人の手と足とを縛り付け引き裂かすのである。

天台大師と乳の五味

釋尊が悟道の末は華嚴敎を以て無上敎として說ひたが敎旨深淵にして容易に理解されないので、阿含、方等、般若、法華、涅槃と種々解し易い經典を作つた。其組立方が丁度牛乳を精製する順序に似てゐるといふので、天台大師は前記五敎を乳の五味に譬へて說ひてゐる。輙ち華嚴は牛乳で、阿含は酪（らく）、方等は酪の前の生酥（せいそ）、槃若は生酥より取つた熟酥、法華涅槃は熟酥を更に精選した所謂醍

醐味で、小乘より大乘に進む佛敎に典を牛乳によつて說明したなぞは頗る面白い。

土用の丑と鰻

安永の頃或る鰻屋の主人が、當時の智慧者平賀源内を訪ねて、店の繁昌する方法の傳授に與りたいと申込んだ。源内はそれに答へて土用の丑の日に鰻を食ふと病氣に罹らぬと云ふ貼札を出させた。其相談に行つた日が丑の日であつたから思付ひたものであらうが、何分源内先生の御話だと聞傳へて來るわ來るわの大繁昌、忽ち分限者になつた。それが鰻屋の故事となつて土用の丑の日には鰻を特別に賣り出す習慣が出來た。

寒の丑と口紅

江戸時代から東京の婦人達は寒の丑に口紅を付けると口中が爛れないと云ふ傳說があつて、丑の日の寒紅と云へば競つて買ふことになつてゐる。昔は此寒紅を買ふ人には寢像の土牛を呉れたものだが、今では牛の底に紅を塗り込んで賣つてゐる。

相場師の起き丑

舊暦で辰の朔日(ついたち)の月は十日、午(うま)の朔日の月は二十日、申(さる)の朔日の月は晦日、酉の朔日の小の月は二十九日は總て丑の日だが、以上の丑の日に限つて起丑の日と唱へて相場師仲間では縁起を祝ふ。一體牛は寢牛と云はれる位で陰なもので溫和しいが、而し一度怒る

と恐ろしい荒つぽくなる所から、相場の高低に當て篏めて騰るとか下るとか、滑つても只では濟まさない連中が、御幣を擔ひで珍重がるのである。

牛は貨幣であつた

日本の「ベコ」は印度の「ベコ」から轉化したとの說もあるが、印度では、貨幣に牛頭を鑄出して之れを「ベコ」と云つてゐる。中部亞弗利加の土人中には今でも牛を以て貨幣の代用をしてゐる。羅馬希臘の古代貨幣にも牛像を押出したものは澤山ある。日本でも今尙ほ朴訥の農家では厩の契を以て唯一の財寶として有難がつてゐる。

太秦の牛祭

三條天皇の御宇長和元年のこと。一代の高僧惠心會都は齡已に古稀を越へて道念益々堅く、信心を捧げて晝夜の勤行に余念もなかつた。或る夜のこと。何時知らずうと〳〵と眠りに就くと、異樣の佛が現れて、安養界の眞の無星壽佛を見奉らんと思はゞ廣隆寺繪堂の尊像を拜すべしとあつた。(當時の廣隆寺には極樂世界を描いた壁畫があつた。)

惠心僧都は夢醒めて奇しさに堪へやらず、廣隆寺を訪ふて、大和安養寺の僧賢澄が刻んだと云ふ丈六の尊像を伏し拜み、更らに自ら手を下して、一刀の下に三尊の佛像を刻み、其成るに及び其年の九月十一日より三ヶ日を期して聲明念佛を修じ、且つ法會をして

末世までも廻轉なからしめんことを欲して、摩多罪神を念佛守護の神に勤請せられた。此神の祭事を十二日の夜中執行することとはしたがこれぞ太泰牛祭の緣起で、今を去る八百六十年前、僧都の七十一歳の時のことである。

其後今日まで世の興亡と共に京洛の地の寧靜を破られた事も少くないが、幸に澁滯なく今日迄一回も休んだことはないさうだ。

「牛祭見るも阿呆、見ぬも阿呆」と京童に謠はれた位で隨分馬鹿々々しい騷をした者であるが有名な者になつた其祭事の一班を記せば

一、捧持（金棒二人）
一、囃方（六人）
一、神事奉行（裃着用四人）
一、松明（二）
一、摩多羅神（業手）
一、各町神燈（十三）
一、箱提燈（二人）
一、若黨（不明）
一、幣持（不明）
一、牛方（摩多羅神の周圍に松明を以て從ふ數十人）

一、牛肝煎（一人）
一、箱提燈（二人）

先づ廣隆寺客殿の庭先より西門を出て、嵐山街道を東へ山門前を過ぎ葛料郡郡役所前を北へ曲つて裏門より再び境内に入り、假金堂の正面に設けられたる祭壇に上り、彼の珍文句の祭文を朗讀するのだ。此讀方が又妙に念入りで、見物人は朗讀中一段毎に「もう一つ〳〵」と聲援をする。祭式に列する者の服裝は、摩多羅神は紙製の冠を戴き、紙製の神面と社祢樣の白の淨衣を着けて牝牛に乘る。此牛には神鞍を置き鞍の上に弊を立つ、四天王は冠を戴かずして淨衣を着け、二人は赤、二人は青の鬼面を着け木製の槍を持つ振つた祭文の全文は、

謹請再拜
謹啓維南瞻部州大日本國